

Fate/どうでしょう？

頭が米騒動

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カルデアの皆がレイシフト先でご飯食べたリ景色を見て、単なる日常とマスターの無茶ぶりに皆がついていくお話し

目次

フランス激動編

おい、ワイバーン食わねえか？

1

カルデア日常編

腹を割って話そう！

10

アメリカ横断編

よーし、生きて帰ろう！

24

アイツだって頑張ってんじやねえか

よっ！

33

気後れするのやめてくれよ…

46

お尻がランブータン

60

京都大火編

毒盛るしかないね

71

人間の夢の跡ですね…

83

その恋はまさしく痔エンド

95

誘拐と言っても過言じゃない

108

ところで君ら何やってんだ？

121

何かのフェロモンでも出てるんですか

ねえ？

133

番外編

カルデア島々マスターは無入島を開拓

できるか？

144

フランス激動編

おい、ワイバーン食わねえか？

—How do you like fate?—

藤丸立香は今、フランスに來ている。

穏やかな陽射し、頬を撫でる風。

ああ、可愛いパリジエンヌとカフェでお茶なんかいいよね？とか何とか思いながら藤丸は微笑む。

「せんぱーい!! 現実逃避しないで指示を、指示をお願いしますーすっ!!」

「アー、アー、キコエナーイ、戦闘音なんてキコエナーイ」

「聞こえてるじゃないですか、もーうっ!!」

絶賛、周りは戦闘中。

現実逃避したっていいじゃない、人間だもの by 藤丸

「百年戦争の真っ只中とか、正気の沙汰じゃなーいっ!!」
「叫ぶ前に指示をーっ!!」

何とか戦闘は終わる。藤丸とマシユと愉快的仲間たちは倒したワイバーンの肉を焼いて食べようとしていた。

「ワイバーンって食べるんけ……?」

「……肉食の動物は不味いと聞きますが……ワイバーンですよね?」

「……基本、竜種を食べるといふ思考は思いつかないのだが……すまない、これから食べるというのに失言だった」

「あら、でも、焼くと美味しそうよ? こう……何というのかしら、ワイルド? 的な」
「マンガ肉ですね、わかります」

Y字型の枝を左右に置き、肉の中心に枝をさしてそこに乗せて薪で焼いている。ぱち

ぱちと薪が火の粉をあげる。ワイバーンの肉の脂が火にかかり、そこから肉の焼ける香ばしい薫りをあげ、ジャンヌはぐうーっとお腹を鳴らした。

「いや、なかなか美味そうじゃない?」

「……わたしたちが食べると共食いという範疇になるのでしょうか?」

「清姫さんやエリザベートさんは人間ですから、大丈夫ですよ、多分」

「ふむ、取り敢えずは次に食べれそうな部分を切り落としていこう」

「私も手伝いましょう。竜を食すというのは生涯有りませんが……私の場合、あれは毒を持った竜でしたので」

ジークフリートはバルムンクを使用してワイバーンの肉を切り落とし、ゲオルギウスはアスカロンを使い、鱗を落としていく。

「……………包丁代わりに使われる名剣エ……………」

「しよがないです、先輩。あれが魔剣、聖剣の宿命なんです……あるところでは借金の取り立てに使われた聖剣もあると聞いたことがあります」

だんだんと肉が焼けてくる。少し肉が大きかった為に周りは焦げているが、中はちゃんとレアになるように火は調節してある。

そこら辺はマリーの好みの焼き方とエリザの好みが被ったので助かった。

「ボクがちゃんと音を聞いていたからね、肉に火が通ったのもバッチリさ」

「なんだ、そのステーキ焼きの名人みたいなの……」

「さすがね、アマデウス……」

「これがワイバーンの焼肉……」

ナイフで人数分の皿にワイバーンの肉をよそっていく。ナイフで捌く際に少し緑っぽい血が出たような気がする。

皿が全員に回ると周りは無言になる。誰が先に食う？そんな視線が飛び交った。暫しの無言。無言に耐えきれず、まず口火を切ったのはエリザだった。

「こ、これをまず食べようって言った人間が食べるべきじゃないかしら？」

「誰だよ……そんなこと言ったの……」

全員の視線が藤丸に集まる。

「……すまない、覚えている限り、それを口に出したのはマスターだった」

「つて、オレかーいっ!!」

「そう……ですね」

「ええ……」

「旦那様……」

流石に庇いきれなかったのか、マシユとジャンヌと清姫はすつと目を反らす。

「マスター、男気を見せるところだっ!!」

「なら、ジャンケンしようぜっ!! 男気見せるんだっいたら男子だけでもよおっ!」
「勇姿は撮りますから……」

いつの間にかカメラを持ち出すゲオルギウス。太い木の枝を持ってバットのよう
に振るジークフリート。デーンとBGMを流すアマデウス。

アマデウス、お前はアウトだ。後でタイキックな。

「くそう、くそう……」

「せ、先輩、わ、わたしが食べます、よ?」

そんな藤丸にマシユがひきつった顔で自らが食べると提案する。藤丸の隣の清姫が
勇者を見る目でマシユを見ている。

そんな様子を見かねたジークフリートは手を上げて。

「いや、待て俺が食べる」

「いや、私が食べよう」

「いやいや、ボクが食べるよ」

サーヴァント男子勢が手を上げて、期待する目で藤丸を見ている。男子勢の目論みが
わかった藤丸はプルプルと震える手を上げ……

「オレが………食べ………ますっ……」

「「「どござどござ」」」

「お前らあ……覚えとけよ……」

藤丸はワイバーンの肉を震える箸で掴み、おそろおそろの口に入れていく。

口を含み噛んでいけば少しばかり固めの筋が入るが噛めない程ではない。肉として近いのは固さ的に猪だろうか？

そして、焼き加減は見た目は生に見えるがちやんと火は通っている。あふれでる肉汁。少しピリツとする感じは、ワイバーンの血によるものか。それが肉にいいアクセントとしてマッチしている。これを一言で表すならば……

「……………美味いわ」

「マジで?!」

エリザが尻尾を震わせて聞いてくる。他の面子も藤丸が食べているのを見ておそろおそろの口に入れていく。

「……………確かに美味しいですね……………」

「ああ、なんと逆にか逆に不味くてテンション上がる方を思っただけだね……………美味しいくてテンション下がるって一体……………」

清姫は上品に口を含み賞賛し、アマデウスは芸人のようなことを言っている。

「カップヌードルに入れて食ったら美味そうだね」

「ああ、少しピリ辛ですから確かに合うでしょうね」

「作って写真取つところぞ」

「わかりました、このゲオルギウスにお任せください」

藤丸とゲオルギウスはいつの間にかカップ麺の上にごんがり目に焼いたワイバーンの肉を乗せて写真を取っている。

何故だろうか、マシユはこの旅の終わりがカップ麺のCMのように終わるのではないかと不安になった。

「マシユはどう、食べてる？」

「はい、先輩。美味しく頂いてますっ！」

マシユの言葉に嘘はない。見た目はゲテモノ料理だが食べていくと癖になつてくる。はむはむと口を含む姿に藤丸はそれはよかったと微笑み、マシユの隣に座る。

サーヴァントたちはどんちゃん騒ぎで酒だ、肉だと騒いでいる。

「ちよつと、想像してたフランス旅行とは違うなあ……」

「……そうですね、フランスは百年戦争の時期です。土地は荒らされてパリも華の都、とは言えませんね」

でも、それでも、とマシユは微笑んで藤丸に寄り添う。

「でも、先輩と一緒にですから、わたしは楽しいです」

「……………今度は平和な時代のフランスに来ようか……………その……………二人で……………」

驚いたマシユが藤丸を見れば照れ臭そうに頬を掻いている。

どんちゃん騒ぎをしている隅で清姫がジーっと嫉妬の炎を燃やしながら見ていなければ満点の空気だったが。

「はい、先輩。わたし、ループルとか凱旋門、いろんな景色を先輩と見たいです」

「そうだね、オレもモナリザとか見たいかな、ダヴィンチちゃんの元だろ？あれ」

「ふふふ、そうですね」

藤丸はマシユの笑顔が見れたから、それでよしとするかなと、この旅の思い出と心に綴った。

後日、カルデアの職員に差し入れでワイバーン肉を送ったところ、全員、食中毒で医務室に送られた。

どうも毒抜きが必要だったようでサーヴァントとマスターは大丈夫だったが生身の人間はダメだったようだ。

ロマンはワイバーンアレルギーになった……

カルデア日常編

腹を割って話そう！

—How do you like fate?—

藤丸立香が風邪をひいた。

その噂はカルデア中に広まり、彼を慕うサーヴァントはてんやわんやしていた。

藤丸の部屋では頭に冷えピタを装着し、寝間着姿の藤丸がベットで横になっている。

「……なのに、何でモーさんはオレの部屋でゲームをしてるかなあっ!!」

そこにモーさんこと、叛逆の騎士モードレットが強襲していた。

モードレットは露出の高いボーイッシュな服装で藤丸の部屋でゲームをしている。

テレビの画面では玉葱のような騎士が巨大な樹木の化け物を滅多うちにしていた。

「え〜？ いーじゃんかよー。マスター動けねーし、種火狩りに行けないから暇なんだよー」

「……………またナイチンゲール女史にオキシドールぎぶぎぶされても知らないぞ……………」

「へへーん、そんなこともあろうかと、ちゃんとうがい手洗いはちゃんとしてきたぜ!!」
「そうじゃないんだよなあ……………」

ナイチンゲールは病氣、怪我といったものに敏感で、あらゆるものを消毒し、対象を看護しようとする。もちろん対象を殺してでも。

病原菌なんぞもつてのほか。うがい手洗いを忘れようものなら彼女のピストルが火を噴く。

彼女の剣幕にバーサーカーのクラスの面々さえ、うがい手洗いエアシャワーと律儀に守るほど。

風邪をひいた藤丸はナイチンゲールから隔離対象とされているのに、そんなところに来れば……………哀れ、モー孩児。

「そう言えば、マシユの奴はどうしたんだ? マスターが風邪ならいると思ったけど」
「んー……オレが食欲ないって言ったら、慌ててエミヤのところ行つて料理を作つて
みたい」

もぞもぞとベットから上半身を起こして、テーブルの上の飲料水を飲む。親切にもポ
○リとア○エリアスが両方揃っている。

「へえー……つて、何でマスターが知つてんだよ? 部屋から出れないだろ?」

「呪腕さんに聞いた」

百貌のハサンなら、百貌。呪腕のハサンなら呪腕と藤丸はハサンの呼び方を決めてい
る。

「あー、成る程。それでか、なんかキツチン騒がしかったの」

「なんか今、戦争みたくなつてゐるって聞いたわ……」

「確かに……オレが見た感じだと……」

モーさんはその時の様子を思い出す。

そこは厨房。料理というはてなき道を進む者たちが集う場所。

そこにはマシユ、牛若丸、静謐のハサンとマスター大好きサーヴァントがエミヤを中心に円陣を組んでいた。

「いまこの時をもって、貴様らはウジ虫を卒業する。貴様らは料理人だ」

「「サー、イエツサーっ!!」」

「さて……貴様らはこれから、最大の試練と戦う。もちろん逃げ場はない。すべてを得るか、地獄に落ちるかかの瀬戸際だ。どうだ、楽しいか？」

「「サー、イエツサーっ!!」」

「いい声だ。では……」

エミヤが声を張り上げる。

「野郎ども！ 俺たちの特技はなんだっ!？」

「「殺せっ!! 殺せっ!! 殺せっ!!」」

「「この料理の目的はなんだっ!？」」

「殺せっ!! 殺せっ!! 殺せっ!!」

「俺たちはカルデアを愛しているか!! マスターを愛しているかっ!? クソ野郎ども!!」

「ガンホー!! ガンホー!! ガンホー!!」

「OK! 行くぞっ!!」

四人は料理器具片手に歩き出す。

彼女らはようやくやく登り始めたばかり、この果てしない料理坂をよ……

「待て待て待て待て、少し待て。ホントにアイツら料理作ってんの？後、最後打ちきりだろうが、それえっ!!」

「いや、マジでそんなんだった」

「マジか……………」

藤丸は呆然とする。料理ってなんだっけと自問自答してしまう。

「まあ、いつかは出来んじゃね？」

「モーさんも軽いなあ……………ズズツ」

ポ○リを啜りながらモードレットのゲームプレイを見る藤丸。

飽きたのか、今はモードレットは別のゲームをやっている。極道のゲームをしながら、「行けっ、このっ」と身体を揺らしているのをブーツと藤丸は見ていた。

「そーいや、マスター。今度はアメリカ大陸に金時とバイクで横断すんだろ？オレも連れてけよー」

「あー、そうだったわ。ゴールドデンとバイクでツーリングの約束してたんだわ。モーさん来るのはいいけどバイクは？」

「バベツジとテスラに任せた。って言うかマスター、免許持ってるのなー」

「誕生日の時に取ったんだよ。ただゴールドデンとバイクの好み違うんだよなー。ゴール

「デンはハーレーとかああいうタイプだけど。オレ、オフロード派なんだよね」

「金時の奴はは確かにハーレーだな。オレはこう、暴れるようなヤツが好きだなっ」

「排気量でつかいヤツかな? あー、マシユもスーパーカブで参戦するし」

「スーパーカブって排気は?」

「50cc」

「マスターは?」

「125ccのオフロード」

「大丈夫か? それ。オレ、てつきり750から1000ccとか思ってたけど」

「大型二輪は持つてないし。まあ、なんとかなるんじゃない? ダヴィンチちゃんが後ろ

からバンで追っかけて来るみたいだし。ゲオルギウス先生は後ろでカメラ回すんだと」

「マジか……………」

二人でバイク談義とアメリカ大陸横断について話を咲かせながら、刻々と時間は過ぎていく。

時間が過ぎても、一向にご飯が来る様子がない。二人もおかしいなと首を傾げている

と。

「失礼しますぞ、主殿」

呪腕のハサンがやって来た。

「あれ、呪腕さんどうしたの？」

「いや、主殿に軽い軽食をと思いましたが。今や厨房は主殿の食事どころではなくなっております……」

「え、何かあったの？」

藤丸の反応にハサンは眉をしかめた後、モードレットの方を見る。

「モードレット殿、あの事を主殿に伝えてないのか？」

「あー、いや、伝えなくていいかなあつて……ぶっちゃけ、どうしようもないじゃん」

「まあ、確かにその通りなのだが……ふう」

溜め息をしながら、呪腕のハサンは経緯を詳細に伝えてくれる。

どうやら、厨房の藤丸の為の料理教室は様子が変わったようだ。

話を聞くと、四人の元に玉藻の前、清姫が現れて、藤丸の料理を誰が作るかと料理対決が始まったとのこと。

悪ノリした他のサーヴァント連中が我も我もと駆け付けたらしい。

ネロが会場を作り、騎士王、英雄王、征服王、ファラオが判定役。

「何、その豪華すぎる料理対決」

「今から、カルデア放送でやるとのことです」

モードレットがやってたゲームを消して、藤丸はチャンネルを変える。

モードレットは後ろで「あーっ!」と叫ぶが無視する。

暗転しているスタジオ。

壮大な音楽が流れ、舞台の中心には一人の男。

黒いマントを着けたウイリアム・シエイクスピアがそこには立っていた。

シエイクスピアは舞台の中心には山積みになった野菜の一つを取る。それはパプリカ。朝取れ立ての新鮮なパプリカ。

シエイクスピアはそれをかじる。かじればパプリカの断面からは野菜の汁が溢れ出す。

彼の背後からは四枚の写真が現れる。この四人が今宵の決闘者たち。愛するものの為に作られる料理は素晴らしいのだと彼は歌いあげる。

さあ、マスターの寵愛を受けるのは誰なのかっ!!

「……………料理の○人かよ……………ちやつかり、マシユ入ってるし……………」

「既に熱狂が酷くてですな、止められませんでした……………特に円卓の騎士等、総出で出ておりましたな」

藤丸に謝ってくる呪腕のハサン。だが、藤丸は手を振って「大丈夫」と答える。

「まあ、皆もフラストレーションが溜まっていたんでしょ。しゃーないしゃーない」

藤丸の言葉に呪腕のハサンは頭を下げて、藤丸の為の軽食を置いて出ていく。

藤丸はふと疑問に思ったことがあった。

「なあ、円卓の騎士は総出なんだろう。モーさんは呼ばれてないん？」

すると何故かビクツとしたモードレットは慌てて弁解する。

「は、はあつ?!ち、違えし、オレの方から断ったんだよつ!!」

「何で?」

顔を赤くしてうつむいてしまう。

「……………そ、それは……………その……………マスターが一人でつまんなくしてないかな、と……………」

二人の間に暫しの無言が流れる。

「え?……………あ……………はい?」

「い、いやっ、変な風に取るなよ?!ほ、ほらっ、オレが父上の事で悩んでた時に相談乗ってくれただろ?!そのお返しして言うかさっ?!」

顔を赤くしながら、両手を前に出してブンブンと手を振るモードレット。藤丸に至っては思考が停止してしまっていた。

「……………その、あ……………心配してくれたの?」

「ば、ばかつ、そんなわけ……………ないだろ……………」

また二人の間に無言の時間が流れる。

藤丸の背中へ、風邪とは違った冷や汗が流れる。

今の状態、部屋に男女二人つきり。藤丸は焦った。意識はしてこなかったが、モードレットも女性。

(何で今、可愛く見えるかなあっ?!)

そんな藤丸を我慢出来なくなったのか押し倒すようにモードレットがのし掛かってくる。

少し息をあらがせ、顔を赤くして藤丸の上に寄りかかっているモードレット。

そんなサーヴアートの力に抵抗できる筈もなく藤丸はなすすべもなかった。

モードレットの顔が藤丸の顔に近づく。二人の息遣いが既に間近に聞こえる。藤丸の息が荒いのは風邪のせいだけではない。

「……なあ、マスター……その、もしも……もしも、オレが王様になったらさ、お前はオレに仕えてくれるか？」

顔を赤くした二人の唇がだんだんと近づく。

二人の唇がもう少しで触れあう……………

——ガチャリ——

「貴女は一体何をしてるのですか？」

撃鉄を上げる音がした。

アメリカ横断編

よーし、生きて帰ろう!

—How do you like fate?—

場所はアメリカ西海岸はシアトル。時代は1783年。アメリカは独立戦争の真っ最中。

「おはようございまーす」

「おはようございませす、先輩」

「うーっす、大将」

「お、おう、おはよう」

そんな中で軽い声が響く。それぞれライダーズーツに着替えた藤丸、マシユ、金時、モーさんのカルデアの四人。

後ろには黒いワンボックスカーが止まっており、何故かつけ髭を着けたダヴィンチちゃん。カメラを回しているゲオルギウス先生がいた。

「えー、只今、朝の5時半です。動物は一匹も出ません」

「そりゃあ、ガンガンにエンジン入れて音が出てつてからよ。そりゃあ、動物も出ねえよ」

呆れたように言うライダースーツに身を纏った坂田金時。

それを無視して藤丸は今回の旅の主旨を発表する。

「今回の旅の主旨を発表しますっ!!」

「ここシアトルからホワイトハウスに向かい、そこにいるクー・フリーンにバイクで特攻かましますっ!!以上!!」

オーっと力のない拍手を藤丸以外の三人はする。

「マスター、ルートはどうすんだよー?」

すると藤丸はアメリカ大陸の地図を出すと指を指して行き先を示す。

「まずはシアトルを出て、南下してサンフランシスコを目指します。」

そこから東に向かいワシントンDCのホワイトハウスに向かうと。

本当なら現代のアメリカでしたかったよ!マリナーズ見たかったよ!でもな、ノリ的に独立戦争の方がいいかなって!」

「俺は現代のアメリカ行きたかったけどよー、ニューヨークヤンキースを見たかったぜ

……」

金時が溜め息をつく。マシユが地図を見て首を傾げている。

「独立戦争時つてアメリカは何があるんでしようか?」

「ちやうど83年が終戦だろ? パリ条約が決まったのもこれぐらいじゃなかったっけ?」

「モードレットさん、詳しいですね……」

「調べた。なあなあ、マスター、行くならイギリスにしないか。」

オレの故郷だし。スコッチ飲みに行こうぜ」

「オレとマシユは未成年者な。まあ、それは次行こうか。」

イギリス料理まずいまずいって言われるけど美味しいものは美味しいからな。だが、ウナギのゼリー寄せ、てめえはダメだ」

「調理の仕方の問題だとわたしは思うんですけど……一度、エミヤ氏がイギリス人の名譽の為に、あれは日本人には合わないと言っておられましたか」

「俺たちは本場のイギリス人も不味いって言ってたの聞いた事あんだけどよ」

「うん、ふるふるのゼラチンの中にウナギがごろごろ入っててさ。」

口に含まんだら、なんか一応香辛料とか入ってるんだらうけど生臭く感じるんだよ……」

藤丸がガタガタと震え始める。そこまで不味かったのか、ウナギのゼリー寄せ。

「なんか、ぐだぐだしてんな。大将早く行こうぜ？兵隊に絡まれたら厄介だぜ？」
「二応、認識障害はかけてもらってるし大丈夫だとは思うけど。ま、そだね。行こうか」

それぞれがバイクに向かい跨がる。マシユはスーパークブで半ヘルとゴーグルを被る。藤丸も同じようにヘルメットを被ってゴーグルを装着する。二人のサーヴァントはしていない。

「おお、マスター、なかなかイカしたヘルメットじゃねえか」

「今回の為に新調した。ゴーグル付けないといけないのが億劫だけどー」

「オレもオフ車にすればよかつたかなあ……………この父上の乗ってたバイクもいいしなあ」

「なんとというか、ホントにツーリングですね……………まさかのサブミッションが人理救済とか誰も思わないのでは……………」

実際にノリがツーリングである。最終的には黒化したクー・フリーンと最古のケルト

ビッチ、メイヴを倒しに行くのは変わらないのだが……既に彼らはカルデアの連中からしてみれば付け合わせのピクルスのような扱いだった。

現にカルデアスタッフの殆どがポテトチップスを食べ、コーラを飲みながら、ゲオルギウスから送られてくる映像を見ていた。

「んじゃ、出発しまーす。ダヴィンチちゃんもよろしくー」

「はいはい、いい映像を撮るから任せといてー」

後ろのワンボックスから手を振るダヴィンチちゃん。ゲオルギウスはカメラに自分の声が入らないようにサムズアップで返す。

「先輩、ゲオルギウス先生は一体、何を目指しているんでしょうか……?」

「……カメラマンじゃないかなあ?とここでマシユは大丈夫?今回、バイクは初めてでしよ?」

「はいっ!講習はちゃんと受けましたし、練習もしましたっ!皆さんの足を引っ張るような事はありませんっ!」

グツと手を握って、意思を表明するマシユ。それに藤丸は頷くとバイクのアクセルを握ってゆつくりと発進していく。

ゆつたりとした旅が始まった。

マシユのスーパーカブに全員が合わせてる為に非常にゆつくりである。

「~~~~~♪」

藤丸に至っては歌いながらの走行。まだ1783年のアメリカは舗装が完備されていない。オフロードバイクに乗ってる藤丸はノリノリで走っている。

「大将、ノリノリじゃねえかよ」

笑いながら、ベアー号を駆る金時。彼のバイクも荒地ながら颯爽と走っている。

「なんだこれ、くっそ、走りづれえ！」

荒地地を走りづらいバイクで走っているわりに笑いながら走るモードレット。モードレットは後ろのマシユに声をかける。

「おーい、マシユー？大丈夫かー？」

スーパーカブで悪路を走るマシユは、三人からはかなり遅れているものの、何とか三人に着いていっていた。ちなみにマシユの後ろからダヴィンチちゃんたちが着いてき

ている。

『安心したまえ、マシユは後ろからわたしたちが見ているよ。ランスロット卿からも言われてるしね』

インカムからダヴィンチちゃんの声が聞こえる。

「わかりました、あの穀潰しには後で城ぶつけておきます」

「ランスロット卿エ……」

カルデアで映像を見ていたランスロットは四つん這いに落ち込んでいた。

周りの景色はゆったりと変わっていく。

マスターと金時、モーさんの三人は時折、道からそれて飛べそうな崖から「ヒヤッ
ハーっ!!」と叫びながら飛びおりて遊んだりする。

マシユはそれをお茶を飲みながら見ている。

目玉の化け物、ゲイザーが現れた際は大変だった。

全員が離脱を考えていたのに、藤丸が「ライダーブレイクっ!」と叫びながら突貫。目

玉を突き抜けて出てきた時は全員が驚いた。ダヴィンチちゃんだけは爆笑していたが。

そして、事件は起きる。

一行は順調にアメリカを横断していたが、途中で大量の機械兵が現れた。

流石に大量の機械兵を相手にするのは面倒だったので迂回しようとエンジンを止めて、地図を再確認。

ルートを決めて、全員が出発しようとエンジンをかけてそれぞれがバイクを発進しようとした時。

「あれ、エンジンが……………」

カチツカチツとマシユがエンジンをかけようとするがかららない。

三人が出発しているのを見たマシユは焦ってエンジンをかけていく。漸くエンジンがかかったが急いで追い付こうと発車した。だが、バイクは動かない。

「えっ？ひゃあああああつ?!」

ニユートラルに入っていたのか、マシユはスロットルを回してギアを慌てて変えたせいか、バイクはワイリーして検討違いの方になってしまふ。

その検討違いの方向には、一人の哀れな機械兵がいた。

機械兵がマシユのバイクに当たり、吹っ飛んだ。

マシユはその時のことをこう語る。

「スロットル回しても動かないから、アレツと思ってギア変えたら、もうウイリーです
よ」

アイツだって頑張ってんじやねえかよっ！

— How do you like fate? —

吹雪のカルデア。雪の上に立つ男とカメラを構えている男が二人。

藤丸とゲオルギウスだった。

「こんばんは、皆さん。今回も始めました」

雪の坂から小さいソリで降りてくるマシユ。

「今夜は前回のアメリカ横断の続きになります。今回はシアトルから出発し、カルデア

一行ポートルランドを目指しました」

「では、皆さん、ご期待ください。」

吹雪が強くなっていく。二人はゲオルギウスを残して離れていく。

「……………ダヴィンチちゃん、めっちゃ吹雪いてんだけとっ!!」

「寒い、寒いですよ……………早く入りましょう先輩」

アメリカ横断ツーリング。マシユのマシユマロウイリー事件の後から始まる。

「いやあ、マジか……………マシユ大丈夫か？」

モーさんことモードレットがバイクを寄せてマシユを心配している。

「マシユ、ゴメンなー？もうちよつとゆつくり行けばよかったな」

「マジビツクリしたぜ……………怪我はないか？嬢ちゃん」

藤丸と金時も心配そうに近寄る。

「はい、皆さん、心配お掛けしました……………ホントに焦りました」

冷や汗と心臓の音が止まらないのか、胸に手を当てゆつくり深呼吸するマシユ。

後ろではダヴィンチちゃんがマシユのバイクを修理点検している。

「ダヴィンチちゃん、マシユのバイク大丈夫？」

「ちよつとボディにヒビが入ってるし、タイヤが歪んじやってるねー。うわ、スポーク取れた……………うーん、直せるけど時間がかかるね、これは」

「マジかあ……………どうする？」

ダヴィンチちゃんの診断に顔しかめる三人。せつかくのツーリングに流石にマシユをワンボックスに押し込める訳には行かない。

「なら、藤丸くん。マシユを後ろに乗せて上げれば？」

「「はあっ?!」」

「「「ガタッ!!」」」

カルデアの食堂で映像を見ていた何名かのサーヴァントが立ち上がる。

ダヴィンチちゃんの提案に一同が騒然とする。

「いや、オレは別に良いですけど……マシユは嫌じゃないか？」

藤丸がマシユに確認すると。

「せ、先輩の後ろに乗る……そ、それはつまり……抱きつくという……」

「嬢ちゃんがトリップしてんだけど……」

マシユがあわあわとよくわからないポーズをとって顔を赤くしながら立ちすくんでいた。

「マシユー? マシユ? 戻ってこようなー?」

藤丸はマシユをガタガタを揺さぶる。マシユはハツとするが顔が赤い。

「は、はい、先輩、お願いしましゅ……」

マシユは顔を赤くして頷く。それを見ていたモードレットは少し不機嫌そう。

「じゃあ、マシユのバイクは車に積むから、ちよっと手伝ってー」

「あいよー」

全員で破損したスーパーカブを車の後ろに入れていく。邪魔にならないようにダヴィンチちゃんはコンパクトに分解していく。

「しかし、簡単にバラすね。ダヴィンチちゃんや」

「うーん？基本、経験だけだね。藤丸くんだつてバイクは改造するだろ？」

「ボアアップとギア比弄るくらいで。流石にここまで……」

ダヴィンチちゃんの作業を見ていた藤丸はダヴィンチちゃんの分解の速さとの確さに驚いていた。いや、万能の天才とは知ってはいたがここまでとは、と。

「ダヴィンチちゃんからすれば現代人の技術も形無しかなあ……」

「それは少しばかり違うね。確かに私は万能の天才と自負しているし、私に作れないものは少ないだろうと思っている。だけどね、それが出来るからと言って現代人の技術が馬鹿にすることはない。このエンジンにしたつてどれだけの時間と努力が注ぎ込まれているのか。それを踏まえて私は彼らに敬意を表しているよ」

分解しながら、ダヴィンチちゃんは語る。バイクの部品を分かりやすいように車に常備された棚に入れていく。

「ふーん、ダヴィンチちゃんはダヴィンチちゃんですスペクトはしてると……」

「それに私が目指した空の旅も、キミたちは作り上げたじゃないか」

「ああ、そう言えば、あのリングの皮みたいなのへリコプター作ってたんだっけ？」

「リングの皮？いや、待つんだ、待ちたまえ、藤丸くんっ!!あれは単純なスケッチだっ!!多分、飛ぶんじゃないかなあ程度で描いた落書きなんだ……あんなので飛ぼうとしてた

なんて思わないでくれ……」

ヨヨヨと崩れるダヴィンチちゃん。

どうやら本人はあのヘリコプターに何か思うところがあつたようだ。自分の考える最強の乗り物的な黒歴史なんだろうか。

こんなダヴィンチちゃんに「わ、わかった」と藤丸は言うしかない。

後に藤丸が他のスタッフに聞いてみると、どうやらあのヘリコプターはダヴィンチの落書きで実際は試作はしてないそうなのだ。

教科書に描いた自分の落書き見られたようなものかと藤丸は考えた。

「でも、多少、芸術性は出してみたんだ………リングゴの皮………リングゴの皮かあ………」

ダヴィンチちゃんは凹みながら、道具をしまつていく。

マシユのバイクも積込が終わり、出発する前にダヴィンチちゃんから全員に声をかけ

られた。

「えーつとオレゴン州に着いたら、エミヤ氏から依頼で食料を取ってきて欲しいのとこのでね。どうする？」

「まあ、変なもんじゃなければ取ってきてくるけど？」

「じゃあ、これを藤丸くん」

ダヴィンチちゃんが藤丸にエミヤからメモを渡される。

「なになに？ヘーゼルナッツ、ベリー、蜂蜜……………鮭？何を作るんだよ、エミヤ」

「先輩、この時代にヘーゼルナッツってあるんでしょうか？」

ハテナマークを着けながら、藤丸とマシユは首を傾げる。

「それと、ベリーと蜂蜜を取りに行くときはナーサリーライムとジャックを呼んで連れていって欲しいそうさ。」

二人が外に出たがっているから頼む、と」

「流石、カルデアの保母さん……………」

甘いものでその場で楽しめることも計画されている。エミヤのオカンさに藤丸は戦慄した。

「じゃあ、取り敢えずはポートランドまでしゅっぱーっ!!」

藤丸を筆頭に全員が出発する。マシユは藤丸の後ろに乗り、ギュツと腰に手を回している。

それをモードレットは羨ましそうに見ている。金時とダヴィンチちゃんはそのをニヤニヤ笑いながら見ていた。

そんな藤丸は背中にマシユのマシユマロが当たって心臓がドキドキしていた。

旅は順調に進んでいる。時折、海側に出て、太平洋側の海を眺める。海はなだらかで海鳥が優雅に飛んでいた。

「次は釣りに行くか……」

海を見た藤丸がふと言葉を漏らす。

「いいねえ、大将。海釣りかあ!!」

『それだと、エミヤやクー・フリーンが来るね』

金時が行きたそうに頷き、ダヴィンチちゃんは苦笑する。

「今回はツーリングだから、道具がないしねー…」

『作ろうか?』

「……………今回はパスで」

ダヴィンチちゃんの言葉に藤丸は躊躇いながら断った。

ツーリングが今回の目的なのだ、釣りが目的な訳ではない。藤丸はこういうところはキツチリしている。

「そう言えば、先輩はメドゥーサさんとイスカンドルさんも誘ったんですね?」

「ああ、二人は遅れてくるってさ。メドゥーサはなんか姉さま方に呼ばれたみたいで、イスカンドルは今日発売のゲーム買ってから来るってさ」

「つてことは時間的にポートルランド辺りで合流か? マスター」

「メドゥーサはどうだろ? あの姉さま方だしなあ…」

藤丸は苦笑する。ステノとエウリュアレの性格の悪さは知っている。だが、それもメドゥーサへの愛情の裏返し。

生前が酷かった三人。せつかく今は三人揃ってゆっくりできるのだ。彼女たちは姉妹水入らずでゆっくりするべきだと藤丸は思っている。

「では、イスカンドルさんがポートルランド辺りでしょうか?」

「恐らくね。そう言えば孔明も誘うっていったなあ……」

「エルメロイさんもですか?! バイク乗れるんですか?!」

あのロード・エルメロイⅡ世がバイクに乗る? 全然、想像の付かないマシユだった。

ポートランドに到着する、一行。

一同は休憩として、バイクを止める。

「大体、シアトルから200 km以上は走ったかなあ……尻がいたいなあ……くああ」

バキバキと音を出しながら、腰を押さえて背中を伸ばす藤丸。

「ふう……身体がカチカチです」

「あー、距離的に丹波から駿河ってか」

「わかりずれえよ、金時」

他の三人も喋りながら身体を動かしていた。

朝早くの出発、遊びながらのツーリングで既に日は真上に来ている。

「ちよつと早めだけどこ飯にしようか？」

「「さんせい」」

藤丸の提案に三人は手を上げる。するとマシユがダヴィンチちゃんの乗ってるワンボックスからお弁当箱を持つてくる。

「今日のお弁当はわたしたちが作りました。ふふふ、皆さんにおみまいしますよ」

マシユの言葉に三人は顔をしかめる。

「どうおみまいするんだろ？」と困惑しながら、お弁当の中身を確認する。それは普通に美味しそうなサンドイッチが箱狭しと入っていた。

「おお、美味そうじゃんかよ」

「どれどれ、かなり種類あんな」

「じゃあ、先ずは一つつと」

藤丸がレタスサンドイッチ一つを取って口にする。すると、藤丸が妙な顔をする。「どうした、マスター？」

藤丸が妙な顔をしているのを見たモードレットは藤丸に問いかける。もしかして、その、不味ののだろうか？モードレットの頭に不安がよぎる。

「いや……………その……………」

藤丸が口を開く。

「メツチャ甘いんだ」

金時とモードレットが不可思議な顔をする。藤丸が食べているのは普通にレタスとトマトが入ったサンドイッチ。甘い要素なんてパンぐらいなものなのだが。

「あ、先輩のは恐らくメディアアリリイさんが作られたものですね」

三人が固まる。そう言えば、マシユは「わたしたち」と言っていた。

「メディアが作ったのか?!あの甘味の魔女がっ?!」

「待って、マシユ、これは、他に、作ったのって誰?」

モードレットの言葉が素通りする。

藤丸が言葉を震わせながらマシユに聞く。すごく嫌な予感がする。聞いてはいけない、だが聞かねば進めない。

「えっと、ブルーディカさん、マリーさん、エミヤさん、メディアリリイさん」

良かった、甘いのはリリイだけか、三人の心は安堵する。

「エリザさんですね」

三人が思った。

あ、これ終わった、と。

気後れするのやめてくれよ…

— How do you like fate? —

雪がしとしとと降っているカルデア。そこにいるのは藤丸とカメラを構えたゲオルギウス。

「さあ、今夜も始まりました、バイクでアメリカ横断の旅。今回はポートランドまでの強行軍。今回はサンフランシスコまでの旅となります」

藤丸の後ろの建物の影には何故か着ぐるみを着たマシユ。顔が出るタイプの着ぐるみ。モチーフは何だろうか？

「……………マシユ？」

不意に後ろを見た藤丸。マシユはサツと身を隠すが着ぐるみの一部が見えて隠れていない。

プルプルと着ぐるみの一部が震えているのを見ると恥ずかしいのだろうか。

「……………えーっと、始まりまーす」

サンドイッチを食べ進める四人。数多くあつたサンドイッチは少なくなり、残るは具が形容し難い赤く染まつたサンドイッチを残すのみとなつた。車組は自分で弁当を持ってきて食べていた。

「「……………」」

全員は無言となる。

明らかに異彩を放つサンドイッチ。メデイアリリーのサンドイッチは見た目とのギャップで甘くはあつたが不味くはなかつた。だが、これは……………

マシユに至つてはお腹が一杯ということ途中でパス。

三人は最後の一個になるまで食べた。そして最後の一個のサンドイッチに三人の直感は告げる。これは死人がでる、と。

「……………どうする、大将。食わねえって判断もありだと思っぜ？」

金時が重い口を開く。確かにそうだろう。別に無理に食べる必要はないのだ。だが、藤丸の思いは決まっていた。

「……………オレが食べよう…」

「正気かつ！マスターっ！これはサンドイッチじゃねえっ！形容しがたい何かだぞっ！」

ああ、モードレットの言う通りだろう。クトウルーでもここまでのものは見ることは出来ないだろう。食べればS A N値チエック1d100は確実、藤丸は思った。

だが、しかし、エリザが一生懸命に作ったのだ、マスターとしてその気持ちに報いなければ。藤丸は腹を括る。

「……………ゴールデン、後は……………頼むっ……………」

涙を堪える金時。

「……………ああ！任せとけ。大将、アンタ男だったぜ……………」

「ま、マスター……………」

マシユとモードレットはポロポロ涙を流している。

藤丸はサンドイッチを持つ。臭いはしない。だが、それゆえに具の赤さが際立っていた。

一体、何を入れたのだろうか？キムチ以上に赤く染まった具とは。魔神柱を凌駕するほど藤丸の脳裏に浮かぶ死の恐怖。

成る程、と藤丸は理解した。これが「人類悪」、「この世すべての悪」かと。

だが、これを食わねばならぬ、人類救済を目指したカルデアのマスターならば。

「……………この世すべての食材に感謝を込めて」

食材と作ってくれたエリザに感謝を込めてサンドイッチを口に近づける藤丸。

「いただきます」

藤丸はサンドイッチを口にした。ただ無言。音がするのは藤丸の咀嚼する音のみ。

藤丸は食べていく。あの形容しがたいサンドイッチを。それを見ている三人はマスターである藤丸を息子を戦場に送り出す母親のように慈愛の目で見ていた。

「……………ご馳走さま、でした」

藤丸は食べきる。だがその顔色は真っ青を通り越していた。藤丸の足が震えているのを三人は見逃さない。

「ど、どうだった？」

モードレットが声を震わせて聞く。藤丸はモードレットを見るがモードレットはビクツとする。目が死んでいる。いや、焦点さえ合っていないのだ、これには歴戦のサーヴァントもビビる。

「美味しくいただけごふああっ!!」

「「ま、マスターあああっ!!」」

藤丸が口から赤い何かを吹き出し、映像が途切れた。

——すまない、映像に不備があったようだ。今しばらく待つてくれ——

「いやあ、あれは強敵でしたね……」

開口一番の台詞がこれの藤丸。テンションだだ下がりである。マシユとモードレッツトが水と胃薬を渡している。

「い、行けそうか、大将？」

「すっげえ、帰りたい」

水を飲みながら、顔色が真っ青の藤丸。胃を押さえながら地面を見ている姿はサラリーマンのような哀愁が漂う。

「ダメだよ、藤丸くん。人理救済をしなければこの旅は終わらないんだっ！というか面白いから途中退場はダメ」

「ダヴィンチちゃん、バカじゃねえの?!」

ダヴィンチちゃんの最後の言葉に藤丸がキレた。ダヴィンチちゃんはそれにテヘペロで返す。

「まあまあ、次はナーサリーとジャックが楽しみにしてるベリーと蜂蜜取りだ。我慢してくれよ?」

「しょうがないなあ……でも、この時代にベリーはともかく養蜂なんかしてないだろ？」

「自生しているの探すの？」

「何だかんだでサーヴァント付き合いのいい藤丸であった。」

「まあ、任せたまえ。キミ達が来る前に私が作っておいたよっ！ TOKIO ばりにねっ
!!」

「伏せ字になってねえっ!!」

「お母^マさん^{スター}、おそいおそい!!」

「ホントにおそい!!」

ダヴィンチちゃんの指示に従い、目的地に向かうとそこにはナーサリーライムとジャック・ザ・リツパーの2名が手を振って待っていた。

「悪い悪い、色々あつてね……イガイタイ」

まだ顔色の悪い藤丸はバイクを降りる。すると二人が抱きついてくる。

「おつとつと」

「二人でマスターのこと待ってたのよっ!」

「でもね、黒猫さんがいて寂しくなかつたよ?」

三人で和気あいあいと話をするのを他のサーヴァントはほのぼのと見ていた。

「ん? 黒猫さん?」

「ええ、野球帽を被った変わった猫さんだったの。今度は野球をしましょうって言つたのよ?」

藤丸は思った。それって高野オン……やめておこう、下手な勘繰りは。下手したら彼女に打たれる。

蜂蜜取りから始める藤丸とナーサリーとジャックは蜂に刺されるのを防ぐために専用の服を着て、養蜂箱から蜂の巣を取り出していく。

他のサーヴァントはバイクの点検、お茶、金時に至っては山にいたグリズリーと相撲を取っていた。

「うっわ、すげえ。蜂がたくさん出てきた」

「お母さん、これが蜂蜜なの？」

ジャックがカサリと蜂の巣を採る。

「そうだぞー、これを絞ったら蜂蜜が出るんだ。蜂のために少し残すのも忘れずにー」

「はーい」

藤丸はエミヤの事をカルデアに保母さんと言ったが、この男も大概である。

二人の無茶ぶりにも答えるお兄ちゃんぶりにカルデアで映像を見ていたアタランテがいいなあと思っていた。

「幼女キタコレ」と言っていた黒髭はルーラーたちに連行されていたが。

三人はダヴィンチちゃん製の蜂蜜絞り機で蜂蜜を絞っていく。グリズリーに勝った金時はモードレットと一緒に蜂の子を焼いて食べていた。

「あつちはハチの芋虫食べてるわ……………」

「ちよつとエビに近いとか、見た目になれたら美味しいんだけどなあ……………」

ナーサリーライムはそれを見て少し引いていた。

「お母さん、ビンを持ってきたよ？」

「ありがとう、ジャック」

ジャックがビンを持って走ってくる。藤丸はビンを受け取り、絞り機の蜂蜜の出し口にビンを当てて取っ手を回していく。

すると出し口から金色に輝く蜂蜜が出てくる。ジャックが舐めたように指を出してくる。

「舐めてもいいよ？ ジャック。ただちゃんと指は後で拭くこと」

「はい、お母さん^{マスター}」

ジャックが人差し指に蜂蜜を着け、口に入れて舐める。ナーサリーライムも同じようにして舐めている。

「あまーいっー！」

「甘い、甘いのもーマスター」

二人が喜ぶのを微笑ましく見る藤丸。藤丸はビンに蜂蜜を摘めていく。ビン一杯に蜂蜜が溜まれば蓋を締める。

何個かビンに摘めていけば、次は自生しているベリーを摘みに三人は行く。ベリー摘みに関しては時間はかかったがジャムに出来るぐらいは取れた。

「じゃあ、ジャムを作っていこうか」

「はい」

テーブルにガスコンロをおいて、鍋一杯に入れたベリーを火にかけて、砂糖とペクチ

ンを入れていく。

焦げないように掻き回していく中、バイクの音が聞こえた。あれはトライアンフかな、と藤丸が考えていると。

「待たせたな」

皮のジャケット。特注品であろうジーンズ。口元には葉巻をくわえたスn………
イスカandalがやって来た。

ああ、成る程。と全員が思った。エルメロイⅡ世がどう来るのか気になってはいたがサイドカーか。イスカandalのバイクのサイドカーにちよこんと若かりし頃のウエイバー・ベルベットが乗っていた。

「遅かったじゃないか、イスカandal」

「いやあ、すまんすまん。小僧が部屋から出るのを渋つてのう。しかし、ブケファラスほどではないが、このバイクというのも良いなあ。なかなか走り心地がいいではないかっ
！」

「ボクは出たくないって言ったんだ。種火集めで疲れてるのに休ませてくれよ……」

ホントにごめんね？ 全員の気持ちが一つになった。でも、また酷使しちゃうんだ。

「後はメドウーサかあ」

「あ奴は姉たちに捕まっておったぞ？」

「あ、やつぱり？」

イスカandalと藤丸が話している中、ジャックとナーサリーライムと藤丸の代わりにマシユがジャムを作っていく。

「孔明、お茶飲む？ 何がいい？」

「……貰う。胃に優しいのをくれ」

ウェイバーの言葉に藤丸は少し泣きそうになる。ホントにごめんね？ マーリンが来たらローテーション制にするから。

「よお、イスカandalの大将。酒じゃねえが駆けつけ一杯どうよ？」

「おお、いただくか。ゴールドデンよ」

金時はイスカandalにコーヒーを渡す。飲酒運転はダメ絶対。子供のヒーロー、坂田金時はそれを守る。イスカandalもそれを知っているために酒を飲むのを自粛している。

「……で、これからどうするんだよ？」

お茶を飲みながらウエイバーが藤丸に聞く。コーヒーを飲んでる藤丸は地図を出してサンフランシスコを指差す。

「ここから、サンフランシスコ目指してアルカトラスに行こうかなと」

「へえ、あの有名なアルカトラスか。もしかしたら、あの暗黒街の帝王とか呼ばれてたりしてな」

「ああ、アル・カポネも下手したら英霊になるのかな。確かに映画とかあるし、逸話も多いなあ」

少しばかり二人でダベっているとジャムが出来たのか三人がピンにジャムを摘めて藤丸を呼んでいた。

「お、出来たのかな？」

「つてことは片付けて出発か、やれやれだよ」

藤丸は手を振ってマシユ達の方に行く。

ジャムが出来て、全員片付けを終える。出発の準備が出来たマシユが藤丸の後ろに乗ろうとすると年少組が文句を言ってきた。

「マシユばっかりずーるーいっ！」

「わたしたちも乗りたーいっ！」

マシユも困惑する。藤丸は苦笑しながら二人をあやしていく。

後ろでモードレットが「オレも……」と言いながら自分のバイクを見ている。

「じゃあ、交代制で乗る？」

藤丸の提案に喜ぶ二人。マシユは少し不満そうだ。

まずはジャックにヘルメットを渡し、途中からナーサリーライムと交代という形にした。マシユはダヴィンチちゃんの車に乗る。

「じゃ、行こうか、しゅっぱーっ！」

全員がバイクを走らせる。ダヴィンチちゃんがバイクにジャックを乗せてる藤丸を見て。

『マスター、事案発生』

「ダヴィンチちゃん、後で説教な」

お尻がランプーター

——How do you like fate?——

カルデアの食堂。イスに座りテーブルの上で手を組み口元を隠す藤丸とそんな藤丸の後方に立っているマシユ。

「カルデアからおはようございます、藤丸立香です」

「マシユ・キリエライトです。巷ではドすけべ礼装、デンジャラス・ビーストと呼ばれ、わたしは大変遺憾です」

マシユのテンション、トーンは低い。少しばかり怒っているように見えるのは気のせいではない。

そんなマシユを尻目に藤丸の目が光る。

「ふ、これを見ている皆さんはマシユが今回どんな格好するか楽しみにしてたでしょう……」

残念だったな！

今回のマシユは普通に制服です。マシユのスク水が見たいと子ギルと一緒に議論しましたが、マシユに却下されました。オレらの声は届かなかったよ……」

後ろで藤丸をジロツと睨むマシユ。顔を赤くして睨む姿を可愛いと思っではいけない。

「えー、今回はサンフランシスコに到着という流れになります。では、どうぞー」

ちゃんと半ヘルを被らせたナーサリーライムを後ろに乗せ、バイクを駆る藤丸。

「すごい、すごいわっ！マスターっ！景色が後ろに流れていくわっ！」

ナーサリーライムが喜びながら景色を見ているのを藤丸も喜んでいた。

カルデアという閉鎖空間の中で年少のサーヴァントに対して娯楽は少ない。こういった旅で楽しんで貰えればマスター冥利に尽きるというものだった。

「ナーサリーは次に行きたい所はある？」

藤丸は何となしにナーサリーライムに聞いてみた。

「ええ、マスターの生まれ故郷の日本に行ってみたいわっ！黒ひげのおじ様が言っただけのアキバとコミケっていうところに行きたいの！いっぱい絵本があるんでしょ？」

黒髭ギルティ。ええ、たくさんありますね、大人向けの絵本がね。藤丸はダヴィンチ

ちゃんにインカムから通信を入れる。

「ダヴィンチちゃん……………」

『ああ、わかっていると。ルーラーたちに連絡しておいた。彼を火刑に処してもらおう』
ダヴィンチちゃんも看過できなかったのかダヴィンチちゃんの重い一言に藤丸は頷く。

「コミケとか、幼子に教えるなよな……………くっそ、部屋に戻ってゲームしたい」

流石に幼子にコミケは早すぎる。そう孔明は呟いていた。

孔明なんかはオタク文化に寛容というか、ぶっちゃけオタクではあるがゲーオタだ。そんな孔明はバイクのサイドカーに座って、口元が寂しいのか煙草、いやシガレットチヨコをくわえている。

孔明は孔明で口では不満を言っただけだが、隣のイスカンドルと旅が出来るのが嬉しいのだろう、何時もの不満げな表情が幾分和らいでいた。

「マスター、日も暮れてきたけど宿はどうするんだ？」

モードレットが藤丸の隣を走りながら声をかける。ナーサリーライムをチラチラ見るのは羨ましいからだろうか。

恋する乙女とはよく言ったもので、モードレットは藤丸の前では狂犬どころかなつきまくったワンコである。モードレットの様子を見た劇作家どもが狂ったように物語を

書いているぐらいだ。

アーサー王の物語に藤丸をモデルにした人物を入れたモードレットの恋愛の物語。これを見たモードレットは劇作家どもを追いかけ回すことになるが。

「そうだなあ………テント張って野宿か、空き家があれば其処にか………飯より宿だな」

「まあ、結構なノープランな旅だしなあ。なら、俺がひとつ走りして探してこようか？大将」

金時の提案に考える藤丸。藤丸は藤丸でテントを張るのも悪くないと思っているが、夜間のキャンプ地は重要であることは自覚している。空き家があるならばそれに越したことはない。

今更ながら、今、藤丸たちがいるのは1783年の独立戦争終盤のアメリカである。更にそこに魔術王の介入まで入っている。出来るかぎり危険な地は選びたくはないのである。

「んあー、じゃあ、頼めるかなあ？」

「了解だ、大将。ちよつくら行つてくるぜ」

手を上げて、少し暗くなった道を走っていく金時。それを見届けたら、一旦、全員はエンジンを止めてティータイムに入る。

バイクから離れた藤丸はお茶を飲みながら、ぼけーっと物思いに耽っていた。カルデアにアルバイト感覚と旅行気分であてみればいつの間にか人類を救うという壮大なことになってしまった。

正直なところを言うと、ぶつちやけ藤丸は世界を救うとか魔術王とかどうでもいいから旅がしたいと思っている旅人氣質な男だった。

そんな藤丸の様子をイスカンドルはくつくつと笑いコーヒーを飲みながら見ている。イスカンドルから見た藤丸という男は実に面白い男だった。何せ、基本的にサーヴァント相手に気後れしない。胆が据わっているというか、あのギルガメッシュにタメ口で話してる姿を見たときは驚いた。エルキドゥが「ついに僕以外に友達が出来たんだね」と涙ぐんでいたのは大爆笑ものだったが。

イスカンドルはこの藤丸立香というマスターについて考える。藤丸立香はこれまでの人理救済の旅において様々な時代を旅をしてきている。その時代の中で藤丸は様々な英雄と話し、轡を並べてきた。英雄の器ではあるのだろう。では、王としての器は？

ギルガメッシュとイスカンドルが雑談の流れで話していた時である。

『あれが王としての器かあるかどうか、だと？あるわけがなからう。あれは誰かを導くことなどもせぬし、支配しようとも思っておらぬ。王よりもゲームで言う主人公気質。どこぞの赤毛の冒険者のようなものよ。』

あれはな、ただバカをやりながら旅をしたいと思ってるだけに過ぎぬ。他のサーヴァントも同じであろうよ。あれと一緒に旅をしたら楽しいだろう、とな。故に英霊共はあれに着いていっているだけよ』

いや、その通りと、イスカンドルは思う。この男との旅はオケアノスへ目指していた時とはまた別のものだ。自らがではなく他人から誘われて行くのも悪くないと。

「なあ、孔明。帰ったらG○エネ教えてくんね？クリア出来ないステージあんだけど」

「ああ、構わないけど……クリア出来ないか？意外と今回から戦艦ごり押しでもいけるだろ？」

「いや、なんで知らんがこっちは命中70%でも攻撃あたらんし、相手は40%で当てるんだぜ？戦艦がいつの間にか沈んでるんだよなあ」

そんな藤丸はイスに座って、膝の上にお茶を飲んでるジャックを乗せて孔明とゲーム談義をしている。

金時のバイクの音が聞こえる。金時が帰ってきたのだろう。

全員がおや?と思う。金時がしよっぱい顔をしている。それに隣に並走しているのは自転車?見たら本格的なレース用の自転車だからバイクに並走出来るぐらいわかるのだが。

「ん?あれ?メドゥーサ?」

「すみません、マスター。遅ればせながらライダー、メドゥーサ、到着致しました」

そうメドゥーサが金時のバイクと自転車で並走していた。いや、何とか全員が思った。メドゥーサ、なんかエロいと。

最終再臨より露出は少ない自転車用のライダーズーツ。一回り、サイズが小さいのだろうか、彼女のスタイルがかなり強調されていた。

ああ、それでか。金時の顔がしよっぱい顔をしていたのは。全員が納得した。

彼女の首元から流れる汗がライダーズーツの開いた胸元を伝う。ゴクリと男子勢は唾を飲む。イスカンドルなんか「おおっ!!」と言いながらのガン見である。ここにフェルグスがいたらどうなっていたことやら。

「やれやれ、男子勢は……欲望に忠実だねえ……」

「むう………」

ダヴィンチちゃんがやれやれと首を振る。マシユは藤丸がメドゥーサの胸を見てい

るのを頬を膨らませて睨んでいた。

メドウーサの胸元を見ていた藤丸はモードレットに尻を蹴られ、金時の報告を聞いていく。

「少し、行った先に集落らしきものがあつたが、その手前にバイコーンの群れがいたぜ」

「あの馬なのか鹿なのかわからん奴が一杯いるのか……」

藤丸がどうするか考える。セイバーは今、モードレットしかない。火力不足が否めない。

「ふつ、藤丸くんらしくない。私たちは何時だつて正面突破じゃないかつ!!」

「ダヴィンチちゃんがサムズアップしてくる。OKとばかりに藤丸はサムズアップし返す。」

「ふつ、そうだった。オレたちは何時だつて前のめりで正面突破だったな！全員突撃

すっぞっ!!」

「「「おーっ!!!」」」

暴走族のノリで藤丸が両手を上げれば全員が手を上げる。我等カルデアに余計な策など不要。何時如何なる時も正面突破。

全員がバイクを走らせれば件のバイコーンの群れが見えた。藤丸はバイクのアクセルをフルスロットルでバイコーンの群れに飛び出す。

「マイクチェックの時間だオラアっ!!!」

それを遠目に見ていた野良サーヴアントの一人は語る。
「あれが普通の人間とか嘘だと思おう」

京都大火編

毒盛るしかないね

— How do you like fate? —

カルデアの廊下。藤丸の私室の前にダヴィンチちゃんが立っていた。

「はーい、おはよう。みんなのダヴィンチちゃんだよー。今は朝の5時。カルデアのマスター、藤丸立香くんの部屋の前です」

ダヴィンチちゃんはこそそこそと小さい声でゲオルギウスのカメラに話しかける。その隣には袴姿の鬼の新撰組一番隊長、おき太こと沖田総司の姿が。

「い、いいんですか？ マスター、怒りませんか？」

「大丈夫、大丈夫。結構、彼も寛容だし」

チャキツとダヴィンチちゃんが構えるはバズーカ砲。まさかの寝起きバズーカのドツキリである。

「ワシがそれやられたら即敦盛じゃわ」

その隣の黒髪の美少女、第六天魔王のノツブこと織田信長は呆れながら見ている。だ

が、そこは止めないのがぐだぐだクオリティ。

「ふつ、是非もないよね」

「それ、ワシの台詞なんじゃが……」

「じゃあ、藤丸くんの部屋に突撃……」

ダヴィンチちゃんがカギを開け、こここそと藤丸の部屋に入っていくとベットに横になって寝ている藤丸が見えた。藤丸の後ろらへんが妙に盛り上がっているのが気になるが。

気にせずカチャリとバズーカを構えるダヴィンチちゃん。後ろの二人はとつさに耳を押さえた。

「では、行つくよー」

ダヴィンチちゃんが藤丸のベットの近くでバズーカの引き金を引くと、ドーンと部屋を、いや、カルデア全体を揺るがす轟音が鳴り響いた。

「ふああああああつ?!?!」

ガバリと藤丸が飛び起きると目の前のダヴィンチちゃんを見る。目の前のダヴィンチちゃんはテヘペロと可愛く舌を出して、後ろのおき太はドツキリ大成功の立て札を持って、ノツプは是非もないよネ?の立て札を持っている。

ダヴィンチちゃん特製バズーカを空砲とはいえ、ぶっぱなしたお陰でカルデアの警報

器はなりつばなしである。

「……………」

頭を抱えて藤丸はダヴィンチちゃんたちを見る。藤丸の額に青筋が浮かんでいるのは見間違いではなかった。

「あ、あの、話と違いませんか？」

そんな藤丸の様子におき太がガタガタ震え始める。ダヴィンチちゃんも流石に予想が外れたのか、あれ？と思いはじめた。

「だから、言ったじゃろ。これは敦盛案件と」

やれやれと首を振るノツブ。まるで自分には罪がないという風だ。

「……止めなかったノツブもギルティだかな？」

「デスヨネー……」

藤丸の言葉に項垂れるノツブ。すると髪を掻きながら藤丸は自分の後ろへと話しかける。

「関係ないけど違う意味で静謐もアウトな」

「あう……………」

どうやら藤丸の私室に忍び込んでこっそり無断で布団に潜り込んでいたようだ。モゾツと藤丸の後ろの布団の膨らみが動けば布団から顔を赤くしてちよこつと顔を出す

静謐のハサン。

「避妊はちゃんとしたか？マスター」

「ノツブ、罰追加」

この人も余計なこと言わなきやいいのに、とおき太は空を仰いだ。

わたしたちは悪い子です、と書かれた札を首から下げた四人は藤丸の前で正座をしている。あの英霊たちがこんな罰を受けさせられているという、なんともシユールな光景だった。

警報器は藤丸が説明の連絡を管制室にしたようで解除されている。今は朝の静けさを取り戻していた。

「……………で、何の用？」

藤丸は欠伸をしながら、四人、いや、三人に対して聞いていくとダヴィンチちゃんが

おずおずと切り出す。

「えーつと……次の旅をですね……決めまして……」

「……………で?」

「……………うう、マスター……………お冠ですよ……………」

朝の寝てる時間にバズーカで起こされれば誰だってキレルだろう。藤丸の頭を押さえて三人を見つめる目がとても厳しい。

「あの目はまるで養豚場の豚を見るかのように冷たい目……………かわいそうだけど明日にはお肉屋さんの店先に並ぶ運命なのねという目付きじゃ……………」

「ええっ?! ノツプはともかく☆5をつ! わたしをレアプリズムになんかしませんよね?!
ねっ?! マスター?!」

「汚い、さすが壬生狼汚いのじゃっ?! ワシじゃって☆5になれるんじやつたらなりたかったわ!! って言うかぐだぐだ本能寺復刻は何時になつたらするんじや、運営!!」

「おお、メタイメタイ」

そんなぐだぐだコンビがガミガミと言い合いする中、ダヴィンチちゃんが藤丸に謝っている。

そこら辺はダヴィンチちゃんと言えど悪いことをしたと思っっているためにまともに謝るのだった。

「いやあ、ホントにごめんよ？悪ノリしすぎちゃったよ……………」

「……………いや、いいけどさあ…………オレはともかくカルデアの警報器鳴っちゃうレベルはダメでしょ」

「はい、その通りです……………はい」

ダヴィンチちゃんがしゅんと項垂れる。それを見た藤丸はため息をついた。

「まあ、反省してるならいいか……………で、今回は何処にレイシフトのするの?」

「……………今回のレイシフトね……………しませんっ!!」

「は?」

いきなり元気になったダヴィンチちゃんの台詞にポカンとする藤丸。レイシフトしないというなら何処へ行こうというのか。

「今回はまさかの飛行機で……………目的地は日本、京都に行きますっ!!」

そんな疑問に立ち上がりながら答えるダヴィンチちゃん。口を開けたままの藤丸。

「はあああああつ?!」

——すまない、今回はレイシフトすることはないようだ。関係ないが俺も行きたかつた——

気が付けば日本は大阪。関西の三大空港の一つ。人工島に作られた海上空港、関西国

際空港。略して関空。

そんな関空を歩き通る人の群れに目立つ集団が一つ。カルデア一行であった。なまじ、それが美人の集まり故に衆人環視も目立つこと目立つこと。

「……………マジか……………マジで日本に帰ってきたよ……………出身地違うけど」

その中の一人、藤丸の茫然とした声が関西空港に虚しく響く。

こんな感じで藤丸は帰ってくるつもりはなかった。しかも実家とか関係ない地域に。隣のマシユは飛行機に乗るのもそうだったが建物を含め周りの物全てが珍しいのかキョロキョロしている。

そんな田舎者のように周りを見ている姿は可愛らしく、儂げで護ってあげたくなるような印象の美少女が隣にいるのだ。行き交う男性たちから藤丸への視線も嫉妬と殺意の入り交じったものが飛び交っていた。

「せ、先輩……………す、スゴいです……………人が一杯です……………」

周りの人が多く、目を回してしまったのかマシユは藤丸の服の裾を掴んでいる。それがまた周りの男性たちの嫉妬を深くしてしまっていた。

「……………なんというか……………スゴいですね……………予備知識で勉強はしてきましたが、まさか此処までとは……………沖田さんもビックリですよ」

「しかも、南蛮人も周りを見ればチラホラと……………凄まじいのー」

更に隣に現代服に身に纏ったおき太とノツブがちよこちよこやつて寄つてくれば美女の倍率がどんと上がる。

彼女らも彼女らで顔は整っているしスタイルもいい可愛い女の子たちだ、まあ、性格はともかくとして。

しかも、後ろにはモナリザに似た美女と褐色の美少女が控えているという事実。何と
いうか濃すぎるメンツだった。

「さて、日本に到着到着つと。みんないるかい？」

「男性陣がまだです……………Mr. ゲオルギウスがどうも空港のチェックに引つ掛かった
みたいで……………」

ワンピースの服を着た静謐のハサンがびとつと藤丸の後ろにくつつきながら答える。
そんなハサンをスルーしながら、カメラとか機材多かったからなあ、と全員が思った。

少し、それから時間が立つと赤毛の少年と機材を持ったゲオルギウスが歩いてくる。
「すいません、ゲオルギウスさんの荷物チェックが中々でして……………」

「申し訳ない、マスター……………」

赤毛の少年はカルデアのアサシンが一人、風魔小太郎だった。現代服に着替えればモデルと間違うぐらいにカッコいい。髪で目を隠している為に見た目がエ○ゲの主人公みたいとか思った連中は漏れなくハイクを読むことになる。

「しっかし、ゴールデンは不参加かあ……」

今回は日本に行くということでMr. ゴールデンこと坂田金時も来るはずだったが、ちやつかり源頼光と酒天童子が着いて来ようとした際に騒動が起きてしまう。それを収める為に今回は金時はお休みとなってしまう。俺たちの事は気にするな、と笑いながら手を振ってた姿が切なかった。

それにながっかりしてしまっている小太郎はここに来る道中も少し元気がなかった。そんな小太郎の肩に手を置く藤丸。

「元気だそうぜ、小太郎。金時と一緒にまたどこかに行こう？」

「はい、そうですね……ありがとうございます、主殿」

藤丸が小太郎を慰めれば、ダヴィンチちゃんが気になっていたことを思い出す。日本と言えば、藤丸の忠犬その3が来ていない。

「日本の英霊と言えば、牛若丸が来なかったのも珍しいね。日本に来るとなれば着いてきそうなの……」

「俵藤太と一緒に金時の救援頼んだんだ……流石に丑御前出てきたら洒落にならんだろうし。一応、もう何人が抑えられそうなサーヴァントにも頼んだけど」

「ああ、成る程………それ、なんかのフラグにならなきゃいいけど」

「……………それを言わんでくれ……」

藤丸が肩を落とす。絶対にフラグは立っているのは藤丸の第六感が告げている。この旅がやすやすと平和に終わるわけがないと。

藤丸の危険察知能力はこれまでの人理修復の旅によって研ぎ澄まされている。この男も伊達に特異点という修羅場をくぐり抜けてきた訳ではない。

「さてと、時間も時間だ。今からバスに乗って京都に向かうよ。予約もちゃんと取ってあるからさ」

「……はわわ……は、初めてのバスですよ……」

マシユはバスのチケットを渡され、珍しいのか色んな角度から見ている姿は愛らしい。

「着くとしたらお昼頃ですね……どうしましょう、主殿？ サツと軽食を買ってバスで食べますか？」

時計とバスの時刻表を見て藤丸に提案する小太郎。

「我慢して、京都でご飯食べようぜ？ 流石にバスの中とか味気なさ過ぎるし」
「成る程、了解しました」

なんやかんやで8人はバスに乗り込むが、その際にも問題はあった。

何度も言うが美人美女の集団が乗り込めば周りの客はざわりとする。しかも偉人、聖人、暗殺者と濃いメンツである。いやがおうにも目立つ。絶対に問題が起きるだろう

なあと藤丸は思う。

「この旅、大丈夫かなあ………」

魔術王が関わってない旅の方が危険を感じるってどうなの、と。藤丸は窓側の席でため息をついた。まさしく、この旅の行く末は神のみぞ知る——

『神と言えどもワタシにもわかりませんデース』

人間の夢の跡ですね……

——How do you like fate?——

2017年 某日 京都駅。

「いやあ、着いた着いた、京都駅」

京都駅に着いたカルデアご一行。

京都駅前には観光客でごった返す中、カルデアの一行は目立っていた。

イケメンと美人の率の高さ。しかも、本格的なカメラを担いでいるゲオルギウスのせいで外国のTVか、と勘違いされる始末。

ノツブこと織田信長とカルデアのマスター、藤丸立香は遠い目をしていた。

「いやあ、目立つとりますな……」

「うむ、儂とマスターはともかく、この色物の多さよ……」

「あれ？沖田さんも日本人ですよっ?!」

「いや、髪が桜色の日本人っていませんし……」

ノツブと藤丸は沖田から目を反らす。

「それスツゴい、今さらじゃないですかーっ?!コフツ?!」

「医者ーっ?!」

血を吹いたおき太に周りがどよめく。

「その、今さらなんですわ、わたしたち魔術の秘匿って大丈夫なんではようか？」
「今さら無理じゃね？」

ところかわって京都駅地下鉄地下街の珈琲屋。

「しかし、京の都も様変わりしましたね……何度か来たことがありますが、まさか地下に商店が出来るとは」

「確かに。空を見ることは出来ませんが、このように菓子も食べれて服も見れますから

ねえ」

「つていうか小太郎、京都来たことあるんだ？」

「ええ、生前にですが。そう言えば、前田利益殿も当時は京住まいでしたね」

「ん？慶次郎の奴がどうかしたのか？」

話を聞いていたノツブが首を傾げる。誰か分からない藤丸は首を傾げる。

「ああ、前田慶次と言えば主殿はわかりますか？前田殿は信長殿の部下の子供で、前田殿はある時前田家を出奔されて京で浪人をされていたんです」

「ほー、利家も苦労したじやろうな。あれは天に愛された男じゃったし」

しみじみと珈琲を飲むノツブ。

「へえ、あの前田慶次かあ」

二人の話に藤丸は珈琲を飲みながら感心する。

流石、戦国時代を生きてきた二人の話には実感が籠っている。

歴史愛好家や学者たちに取っては垂涎の話ではないだろうか？

「はー、前田慶次ですかあ、槍の名手とは聞いたことはありますがノツブが誉めるつてそれほどこですか」

「あれこそ天賦の才と言えたらうよ。武にしっかり教養にしっかり。いや、違うの。あ奴の生き方こそ天に愛されていた。自由に生き、自由に死ぬ。言葉にすれば簡単ではあるが

生きていれば何かしら柵があり実践するのは難しい」

農じやつてそうじやつたからの、と言葉を紡ぐ。

「戦であれば誰もが死に物狂いで戦う。銃弾や弓矢が飛び交い、足軽達が槍を振るう。将は策に裏切り何でもありよ。そんな激動の時代を生き抜くというのは生半可なものではない」

「ええ、あの方は最終的に上杉家に仕官しますが、長谷堂城の戦いで撤退戦で殿を務め見事に生き残っています。そこからは米沢で和歌を書きながら悠々自適に過ごされた」と

「ふ、あ奴らしい」

小太郎の言葉に少しだけしんみりしたノツブ。

すると目を細めて藤丸を見たノツブは優しく微笑み、藤丸の額に指をおく。

「話をしていて気づいたが、少しだけあ奴にマスターは似とるかもしれない。世界の危機という規模ではないが、あれは戦においても人と人の繋がりや忘れん男じやつた。敵であろうと味方であろうとも」

いつもと違うノツブに少しドキツとしてしまう藤丸。

「まあ、まだあ奴に比べると漢振りが足りんがのっ！」

「……………はいはい」

笑うノツブの言葉に苦笑しながら藤丸は相槌を返す。

少しだけ、少しだけではあるが藤丸は織田信長という人物が見えたような気がした。

日の本という国に革新を求めた魔王。比叡山を焼き討ち、数多の大名を倒し天下統一を目前にして腹心の部下に討たれた彼女。

彼女は未来を見据えていただけだ。それに周りがついて行けなかった。

だけど彼女は人を蔑ろにしていた訳ではなかったのだろう。それが周りに伝わりにくかっただけで。

「あと因みにこれはテストに出るからのー」

「何のっ?!」

珈琲を飲み、昼食にしようとして地下街を探索する一行。

「何処でご飯食べようか?」

「エミヤ先輩曰く、京都駅隣のデパートのデパ地下も一見の価値ありとおっしゃられて

いました」

「……………彼は一体何の英霊なんでしょうか？」

マシユの言葉に藤丸の後ろにピトツとくつついている静謐のハサンが言葉を漏らす。

「……………もうホントにわかんねえな」

ハサンの言葉に何も言えない藤丸。

「しつかし、デパ地下かあ、買わないって思いつつも何かスツゴい買いそうな予感するんだよなあ……………」

「ああ、何となくわかるよ、それは。何なんだろうね、デパ地下という響きだけで旨そうな予感がするもんね……………恐らく買っちゃうよね」

ダヴィンチちゃんも藤丸の言葉に頷く。

「試食ありますって食べた時に、予想外の旨さと食べたなら買わなきゃいけないっていう、なんだろう、あの感情」

「わかる、すつごいわかる。あと勧めてくれた人の為に買いたいなあっていう変な心理働くよね……………」

何故か藤丸とダヴィンチちゃんのデパ地下あるあるが咲き乱れる。

「あの……………飯どうしましょうっ」

「あ……………」

盛り上がっていた二人は冷静になり、どうしよつかという空気になる。

「うーん、適当な洋食屋さん入る？」

「そうしましょうか……………」

結局は、近くにあつた洋食屋さんに入り、洋食を食べることに。

ハサンに関しては出身が中東地方もあり、食文化と宗教の違いによつて食べられるものが限られてくる。

「申し訳ありません……………」

「いや、しょうがないよ。宗教とか大変だからさ」

ハサンの食べれるものを店員と話ながら決めていく。

頬を染めて、藤丸の隣にピトツとくつつく様に店員が青筋を浮かべていたのはしょうがないと思う。

それに膨れるマシユに苦笑いを浮かべる小太郎。

「しつかし、南蛮の昼食とは日本の食文化も変わったものじゃの」

「戦後の日本はアメリカの肉食主義とかパン食にさらされてしまった感はあるけど、そこから日本らしさは取り戻しつつあるとは思うよ」

「と、言いますと？」

「いや、洋食ってさ。確かに西洋料理のことでもあるんだけど日本で独自に発展した西

洋風の料理を指す場合もあるんだよね」

藤丸がお冷やを飲みながらおき太に説明する。

「独自に発展した、ですか？」

「例えば、ナポリタンとか。これ作ったの日本人でナポリタンとか謳っているけどイタリアにないらしいし」

「え、そうなんですか？ナポリタンって書いてあるからイタリアのものじゃないんですか」

「皆さん、勘違いしやすいのかと。わたしも先輩がナポリタンを頼まれているのを見て、えっ？と思いましたし」

「エミヤが日本の英霊じゃなきゃわからなかったろうな……」

苦笑しながらお冷やをすする藤丸。

「ふむ、新たな物に興味があれば何事も発展はせぬよ。しかし、日本人の新しい物好きも今に始まったことじゃないのー」

「ノツプはそのパイオニアですもんね……」

料理を待ちながらノツプは語る。

「お待たせしましたー」

料理が運ばれてくれば全員が料理に手を着けながら話を進めていく。

「そう言えば、京の都が衰退したとされる理由を主殿はご存知ですか？」
「ん？ どういうこと？」

「京都には巨椋池という場所があるんですが時の太閤秀吉が治水整備で弄くつたせいで風水的に力の流れが大阪に行つたという説があります。明治頃に干拓地になり今は地名しか残つてません」

「へ、へえ……」

「風水、ですか……確か江戸も風水都市と聞いていますが本当なのでしょうか？」
マシユが料理を食べながら小太郎に聞いてくる。

「確かに江戸城を中心に力が集まるように作られた都市と言われていますね。発案者は南光坊天海と言われる天台宗の僧です」

何か授業みたいだなあ、とナポリタンをすする藤丸。

小太郎はマシユに当時の戦国時代とカルデアで調べた情報を吟味し教えている。

流石、忍者といふべきか情報のインプットもアウトプットも上手かった。

「武蔵ちゃんも江戸時代の人間だから詳しいかな？」

ふと藤丸は気になったことを呟く。

「武蔵殿ですか……あの方の場合は少しややこしいかと……」

「いや、その前にあの宮本武蔵が女性という点について沖田さんは言及したいんですが

……」

「儂が言える立場ではないが、お主が言うなし」

「アーサー王が女性の点で今更な話ではあるよ……私だつてまさかこう言うキャラになるとは本レオナルド・ダ・ヴィンチ人すら想像出来なかつただらうね」

ダヴィンチちゃんのメタ発言に全員が顔を背ける。

「は、話を変えましょうか？」

「そ、そうですね」

怪しくなった空気を変えようとマシユが話を変えようとする。

「あー、武蔵ちゃんつて結構ビツクネームだけど他に有名な剣豪つていたの？」

「儂の生きていた頃じゃと塚原ト伝や上泉信綱かの」

「新撰組の皆は有名ですよ。ですが、芹沢だけはゆるしません。薩長連中も同じく」

目がキラッと光るおき太。

「ホントにお主薩長嫌いなんじゃないや……」

「ええ、見つけたら齋藤さんのように悪、即、斬です！」

藤丸は言えなかつた。島津といえは日本有数の大企業になっていることを藤丸は言えなかつた。

言つたらどうなることやら……

「みんな強かったですよー。私ほどではないですが縮地はみんな出来てましたし。齋藤さんなんて一突きで相手の上半身が吹っ飛ぶ程でしたから」

「何で、お主ら戊辰戦争負けたんじゃ……」

「そこは多勢に無勢ですよね……私としては最後まで参加したかったんですが」
少しだけ寂しそうなおき太。

新撰組の天才剣士、沖田総司の願いは「最後まで戦い抜くこと」。

彼女の願いは藤丸の元で叶えられただろうか？

藤丸は彼女に問いかける。

「おき太はさ。オレの元で満足してる？」

藤丸の問いにおき太は考える。

自らの剣は主義主張など知ったことではない。単なる殺人剣であるとおき太は思っている。

それを物怖じもせず指示し、自らの願いを叶えようとしてくれる彼には好意を持っていた。満足しないわけがない。

「そうですね、新撰組の皆がないのは寂しいですが……ええ、満足しています。生前は誰かの為に剣を振るうことなんて考えなかつた私ですが、貴方の為に振るうのは悪くないと思っています」

他のサーヴァントもそうではないだろうかとおき太は思う。彼のお蔭で生前叶えられなかったことが叶えられた者がいるのだ。アーサー王と語り合えたモードレッドしかり。

願いを叶えてくれるだけではない。彼はちゃんと自分を見てくれている。だからだろう自分が着いていこうと思えるのは。

おき太の屈託のない笑みに藤丸も笑みを返す。

「ホントにこのマスター、人たらしじゃわ……かくいう儂も引き込まれた一人か。何とも因果なもんじゃなあ……」

おき太の笑みを見た織田信長の呟きは誰に聞かれることなく京都の町を流れていた。

その恋はまさしく痔エンド

— How do you like fate? —

2017年、某日、京都タワー前。

「先にお土産買ったとく?」

昼御飯を食べたカルデア一行は先ず京都駅周辺を探索しようと京都タワー前にいた。

「先輩、それは後でよろしいかと帰りに買った方が日持ちの関係上いいとエミヤ先輩が言っていました」

「……………あ……………」

マシユの言葉を聞いて京都の空にエミヤの笑顔を幻視した藤丸。

配布されている京都のバスの路線地図を広げ、どうするか考える一行。

「うーん、先ずはバスの日乗車券買ってしまおうか」

「うん、確かに。バスの日乗車券あれば京都市内であればフォローは出来るしね」

「うし、じゃ、ごめん、小太郎……」

「買ってきました、主殿」

買って来てくれ、という藤丸の言葉より前に先に買っていった小太郎。

流石、カルデアで気のきくサーヴァントの上位に入る一人。

京都に來なかつたが呪腕のハサンもその一人である。

「あ、ありがとう」

ただ、サーヴァントたちの先読みのレベルが高過ぎて、藤丸が逆に困惑してしまうパターンも多いのだが。

小太郎から一日乗車券を受け取りながら、そう言えばとふと藤丸は疑問を覚えた。

「そーいや、ダヴィンチちゃん宿はどうしたん？」

「ん？ああ、電話でちゃんと予約しておいたよ。」

もちろん二人部屋を二部屋ね」

「「「「ん？」「」」」」

ダヴィンチちゃんを除く全員が首を傾げた。

何がもちろんなのだろうか？ 8人いるから四人部屋を二部屋なら分かるのだが。

「え？ 四人部屋を二部屋じゃなくて？」

「ああ、旅館の人も困惑してたよ。」

8名様でしたら四人部屋が空いてますからそちらはどうですか?と。

私は言つてやつたよ、いいや、二人部屋を二部屋と。四人部屋にするなら安くしろと」

「いや、その理屈はおかしい!」

「そりや、旅館の人も困惑するじやろうよっ!」

おき太とノツプがダヴィンチちゃんに突つ込んだ。

「待て、ダヴィンチちゃん」

嫌な予感がした藤丸はダヴィンチちゃんに問いかける。

藤丸は嫌な予感に冷や汗が止まらない。

「なんだい?藤丸君」

「……………部屋割りつてどうなつてん?」

その藤丸の言葉にニヤリと笑うダヴィンチちゃん。

ピシツと固まる女性陣たち。

「ふっ、良いところに目をつけたね……………」

ダヴィンチちゃんが人の悪い笑みと同時に言葉を紡ぐ。

全員がゴクリと唾を飲む。

「これから決めるに決まってるじゃないか」

「ゲオル先生、小太郎、ダヴィンチちゃん頼む」

藤丸の切なる願いにダヴィンチちゃんを除く二人が涙した。

「ダメだよ、藤丸君。」

男四人とかそんなんじや、面白くないだろう？部屋割りは君一人、女性陣の中から3人だ」

「なん……………だと……………」

お前は女性なのか男性なのかどっちかにしろ、と思いながら藤丸は膝をつく。そんな中、女性陣たちは鬪志の炎を燃やしていた。

「ふっ、ついに沖田さんの本領発揮と言ったところででしょうか？」

「はっはっはっ、抜かしおるではないか、壬生狼ごときが？」

「せ、先輩の貞操はわたしが守りますっ!!」

「……………チャキツ」

おき太とノツブ、マシユ、ハサンは既にスイッチが入っている。

無言で暗器を持っているハサンが何気に恐ろしい。

今、ここに聖杯戦争ならぬ、部屋割り戦争が始まろうとしていた。

四人のうち一人は省かれる、逆ならともかくこれは酷い。

「……………オレ、鴨川で寝ようかな……………」

藤丸の悲しい呟きは誰にも聞かれることなく雑踏に流れていった。

部屋割りは女性陣たちが勝手に決めるだろうと藤丸は溜め息を吐きながら、勝手に盛り上がる女性陣たちを尻目に取り敢えず一人で次の目的地を決めようとする。

「さて、何処にいきましょうか？」

「現実逃避だね？わかるともっ！」

「帰れ、マーリン」

いつの間にかいたマーリンに腹パンをかます藤丸。

ぐおおつ、と腹を押さえて踞るマーリンに藤丸は何度目かの溜め息を吐く。

マーリンという目立つ人物がいるというのに誰も気にしていないのはマーリンが認識阻害の魔術をかけているからだろうか？

「何で来てんの？」

「いやなに、楽しそうないイベントがあると聞いてね」

「はっはっはっ、マーリン、お前の目は節穴か？」

藤丸はマーリンの目に容赦なく目突きを行った。

「イイツ→タイ←メガアアア→」

目突きをくらったマーリンはごろごろと地面を転がる。

そんなマーリンを無視しながら地図を見直す藤丸。

「ホントに何しに来たのさ？」

「……いやいや、少しばかり我がマスターの様子を見に来たのさ。モードレッドが見に行くと特にうるさくてね……」

ケロツと立ち上がるマーリン。

マーリンの言葉に藤丸は地図から顔を上げて申し訳なさそうな顔をする。

「あー、なるほど……今回はモーさんは誘わなかったからなあ……悪いことしたかな」

「マスターの故郷をみたいと思うのはサーヴァント全員が思ってることさ、そこはしようがない」

「そんなもんな……」

マーリンが微笑みと同時に優しく藤丸の肩をポンと叩く。

「まあ、今は君が守った世界を我が儘に楽しむといい、君にはその権利があると私は思う」

「……なんか、企んでる？」

「ハツハツハツ、信頼がないなあ、私は。だが、君のこれからのことと思うと私だって優しくもなるさ」

藤丸は胡散臭げにマーリンを見る。

表情を少しばかり引き締めるマーリン。

「君は確かに世界を救った。でも、この平和は一過性の物だ。

人類悪が表れた世界は連鎖的に次なる災厄に見回れる。

冠位を持つていた私や山の翁、キングハサンですら勝てるかどうか」

いつもと違うマーリンに困惑する藤丸。

「君が全ての人類悪と関わるかは、千里眼を持つている私にもわからない。

私が見れるのはその時代のことだけだから。

ひよっとしたら関わるのは君の次の世代かも知れない。その前に君の描く英雄譚が

どのように終わりを迎えるのか。

だけど私は、いや、私たちは君がハツピーエンドで終えることしか望まない」

話すマーリンの言葉に熱がこもっていく。

今のマーリンを見たら円卓の騎士たちは「誰だ、お前」レベルの綺麗さである。

だけど、彼が本当に自分に対して親愛の情があるのは藤丸にも感じられた。

「カルデアの職員や私も含めて皆、君のことが好きだからね」

恥ずかしげなく言うマーリンの言葉にキョトンと藤丸はしてしまふ。

「そして、ロマニ・アーキマン。 Dr. ロマンだつて君がバットエンドで終わることなんて望んでいないさ」

そして、その言葉を聞いた自身の顔と心に熱がこもつていくのを藤丸は感じて、少しばかり泣きそうになるのを藤丸は顔を背けてこらえた。

カルデアの誰もが覚えている。頼りなく臆病な癖チキンに何事からも目を背けなかった仲間姿を。

「それは……………その言葉はズルいわ……………」

「はっは、魔術師なんて皆ズルいものさ」

泣きそうになつた藤丸の頭をマーリンは優しく微笑みながら撫でる。

「…くっせ、マーリンの癖に」

「これこそ年季の違いという奴さ。」

人を騙したりするのは得意だし、どれだけ私がアルトリアを困らせてきたと思つてるんだい？」

「それを自分で言うのかよ……………」

マーリンに頭を撫でられながらジト目で睨む藤丸。

頭を撫でるのを止めたマーリンはふと思ひ出したかのように遠い目をする。

「しかし、次の人類悪《ビースト》よりも、私も人のことは言えないんだが君の女性関係の方が不味いんじゃないかい？」

「あー……………」

「何故か君はエレシユキガル嬢を含めて神格持ちの女性にもモテるしねえ。」

英霊の女性たち、特に清姫嬢は言わずもがなで……………多少は自覚はしてるんだろ？」

「うん、まあ……………」

思春期の少年らしく藤丸は顔を赤らめるがマーリンの表情は固い。

「正直な話なんだけでも……………ぶっちゃけ、君が死んだあとが一番大変になるんじゃないかと思うんだ、私は」

マーリンの言葉に顔を背ける藤丸。

「生きているうちは、まだ何ともなるかも知れない。」

君がハーレムを選ぼうと、ただ一人を選ぼうとね。

流石にハーレムを選んだ場合、親御さんにどう説明するかは難しい所ではあるがねっ
！

「ホントにどうしろと……………」

その様子をイメージしたのか藤丸は顔を手で覆う。

追い討ちをかけるようにマーリンは言葉を紡ぐ。

「だが、君も知つての通り、神格持ちの女性は嫉妬深く、更には執着しやすい。アルテミスという例もあることだし……」

あのスイーツ脳の女神アルテミスに熊のぬいぐるみのような姿にされたオリオン。

女癖については言及はしないが、永遠とも言える時間をあのような姿で過ごさなくてはいけないとは。

確かに同情してしまうが、藤丸に取つては他人事では無くなりつつある。

「ケツアルコアトル、エレシユキガル、ゴルゴーン、あと聖槍を持ったアルトリア。特にこの四天王はヤバイね。」

多分、君の魂を独り占めしたいだろうし」

「もう既に勝てる気がしない……」

その四人の名前を聞いた瞬間に天を仰ぐ藤丸。

「だけど、ぶっちゃけ面白そうだと思つてる私もいるんだけどねっ！こう一人の男を取り合う為に自主規制的な薄い本的なアレが捗るよっ！」

「お前、やっぱリクズだわっ！」

さつきまでの綺麗なマリーンはどうしたと言わんばかりに藤丸は吠える。

ギヤー、ギヤーと騒ぎ会う二人はまるで友人のようだった。

「……………さて、と。藤丸君の様子も見れたことだし、私は私で京都を満喫しようか」

藤丸と別れてモグモグと生八つ橋を食べながら人の隙間を歩いているマーリン。

「ただ、藤丸君には言うのを忘れたけど、別に私一人で来たとは言つてないんだよなあ」
染々と天を仰ぐマーリン。

いや、この男の場合、わざと言わなかったという正しいのだろう。

それによってマーリンは藤丸が更なる苦勞するのを楽しみにしていた。つまり、確信犯である。

「ふふふ、藤丸君も驚くだろうなあ……」

楽しそうにマーリンは歩き続けるが、居なくなつた友人を悼むように言葉を続ける。

「ソロモン王、いや、ロマネ・アーキマン。君の代わりに私が彼の英雄譚を見届けよう」
微笑みながら、マーリンが見る先には山の中腹をとぐろを巻いた巨大な黒き蛇が藤丸の
ことを見つめていた。

「ただ、彼女を連れてきたのは不味かつたかなあ？」

誘拐と言っても過言じゃない

— How do you like fate? —

「そーいや、新撰組で有名な池田屋ってどうなってるんだっけ？」

「確か、現在は料理屋になってるとのことですが……………」

「池田屋ですか……………懐かしいですねえ。」

あの当時は土方さんといい、永倉さんといい、みんなヒヤツハーしてましたから、討ち入りとなると全員人が変わってましたよ」

「なんという世紀末……………いや、幕末じゃったか……………ホントに何でお主ら負けたんじゃ……………」

「ホントにな……………」

染々としてゐるおき太に遠い目をするノツブと藤丸。

藤丸たちが地図を見ながら話し込んでいると、藤丸は誰かに見られているような気がして周りを見渡す。

「どうかしましたか？先輩」

「いや、なんか見られているような気がして……………」

藤丸は気のせいかと地図を見直した時だった。

「ツ?!先輩?!」

「お、おおっ?!」

藤丸の身体を何者かが奪い去った。

歴戦のサーヴァントたちは気が緩んでいたとはいえ、その速さに全員が反応出来なかった。

「小太郎さんっ！静謐さんっ!!」

「御意っ!!」

「お任せをっ!!」

辛うじて反応できたアサシン二人はその影を追おうとするが。

ニタアと笑うその影の目を視た瞬間に身体が石のようになり、動けなくなる。

「なッ?!」

「これはっ?!」

動けなくなった二人を尻目に謎の影は藤丸を拐って何処かに消えていく。

「せ、先輩いいいッ!!」

藤丸を呼ぶマシユの叫びが虚しく京都の町に響く。

「で? 何で来たん?」

「お前が私を差し置いて、旅に出るのが気に食わなかったのな。魔術師を脅して着いてきただけだ」

藤丸が拐われた位置から少しほど離れた、とある高層ビルの屋上に藤丸と誘拐犯の二人はいた。

誘拐犯こと藤丸を拐ったのはカルデアに居るはずのゴルゴーンだった。

「なるほど、寂しかったからついできたと」

「ほう、そんなことを言うのはこの口か」

藤丸の言葉を聞いたゴルゴーンは藤丸の頬を引っ張る。

「いふあい、いふあい」

藤丸のゴムのように伸びる頬を引っ張りながら、フフフと笑うゴルゴーン。

そして藤丸をまるで人形のように蛇のような髪を使い、自らの膝に座らせた。

それには流石の藤丸も恥ずかしかったのか、抵抗しようとするがサーヴァント相手には流石に勝てなかった。

察しの良い方は分かるであろうが、敢えて言おう。

今、二人の体勢から藤丸の頭の位置にあるのは、まごうことなき豊満な『おっぱい』である。

もう一度言おう、『おっぱい』であると。

「あの、すいません、勘弁していただけませんか？」

「何を、だ？」

ゴルゴーンはまるでイタズラツ子のような笑みを浮かべ、顔を赤く染めた藤丸を弄ぶように身体に触れていく。

「わかつてやってるよな？」

「ふふふ」

端から見れば仲のいい、イチャイチャしているカップルに見えなくもない。

但し、うねる蛇のような髪と、長く黒い蛇の尻尾が無ければの話だが。

「では、マスター。今日は私のためにこの町のエスコートをお願いしよう」

「ちよつ……その格好で？」

藤丸はゴルゴーンの格好を見て思わず聞き返した。

心外など言わんばかりにゴルゴーンは藤丸を睨む。

本気で睨むと藤丸が石になるので、そこは配慮はしていたが。

「私とて分別はある。この姿なら良いだろう？」

ゴルゴーンが光に包まれれば、そこにいたのは黒い服、ジーンズに魔眼封じの眼鏡をかけたメデューサが。

「こんな時のためにキャスターどもに姿を変えられるように頼んでおいた」

「ああ……………そう……………」

藤丸はカルデアで死屍累々のキャスターたちを幻視した。

「このような時にしか役に立たんだ。使つてやればよからう、特にパラケルススなどは」

「ひどい言い様だけど、パラケルススに関しては擁護出来ない……………っ！」

パーティに入れても使い処がわからず、単なるおもしろイベントの黒幕要員になっている、パラケルスス。

そんなパラケルススにくつと顔を押しさえる藤丸。

「ふ、そんな話はどうでもいいのだ。」

今日のマスターの時間は私のもの。早く町へ行こうか」

急かすように腕を引っ張るメデューサことゴルゴーン。

「そんなに急がなくても……………なんか急ぐ理由あるの？」

藤丸がそう言えば、何故かゴルゴーンはしよっぱい顔をする。

それには藤丸、嫌な予感がした。

「……………私だけではないのだ」

「はい？」

「京都に来ているのは私だけではないのだ」

そのゴルゴーンの言葉により、藤丸は固まった。

「……マーリンが連れてきたのってゴルゴーンだけじゃないの?」

「……お前はサーヴァントの性格と力を甘く見ているだろう?」

あれらをお前カ以外ルの人間デが簡単アに止められると思うのか?」

「あー……………」

ゴルゴーンの言葉に遠い目をする藤丸。

確かにサーヴァントの性格と力に関して失念していた部分が藤丸にはあった。

「お前は公正に連れて行く人間を決めたのかもしれないが、納得のいく奴等ばかりではないということを知っておくといい」

「……………うん」

「後は自由に抜け出して遊びに行く奴もいるのも覚えておけ…」

「マジでか……………」

「ケツアルコアトルは新○本プロレス見てからこっちに来ると言ってたしな……………」

「ホントに好きだな、あの人……………」

呆れたような藤丸の声。

「まあ、とにかくだ。」

他の奴等が来る前に私のためにお前と……………っ!!」

突然、ゴルゴーンは藤丸の手を引つ張り、その場から離れば炎を纏った剣が二人のいた場所に刺さった。

ゴルゴーンは藤丸を抱き締め、剣が飛んできた方を見ると。

「一人だけ抜け駆けとはいいい度胸じゃない？泥棒猫、いえ蛇かしら？」

そこにはワイバーンに乗ったジャンヌダルクオルタ。

通称、邪ンヌがそこにいた。

「あ、邪ンヌちゃん、ちーつす」

「ちーつす。

ってか、ノリが相変わらず軽いわね。

助けに来たのになんというか……助けがいないわ」

「そういわれましても……」

ゴルゴーンに抱き締められながら、藤丸は邪ンヌに声をかけるも、呆れた目で邪ンヌに見られてしまう。

「ふん、贗作風情が何しにきた？」

ゴルゴーンは邪魔なものが来たと邪ンヌを睨み付けている。

「はア？私が召喚で呼ばれる以外で来る用事したら一つしかないでしょ？」

そこにいるマスターを返しなさい、ゴルゴーン。

そして、藤丸、後でデートよ」

藤丸にビシッと指を指す邪ンヌ。

「ほう……………」

その言葉にゴルゴーンの眉がピクリと動いた。

「ならば、私から奪いとって見せるがいいっ！」

「上等っ!!」

あ、二人共キレていらっしやると気づいた藤丸は咄嗟にゴルゴーンから離れて横にダ
イブした。

一案の定、藤丸の予測通り、炎が舞い踊り、ビルの屋上を燃やしていく。

「あっつー! あっつっ!!」

炎を払いながら二人の巻き添えを食らわないうように離れていく。

ポケットからスマホを出すと、マシユの番号にかける。

「HQ、HQ」

『先輩っ!?! ご無事でしたかっ?!』

「こっちは何とか。」

そっちは何かあった?」

『……………円卓の全員が来てました』

マシユの重い声に藤丸は溜め息を吐く。

「あー……………今は合流しない方がいい？」

『アルトリアさんがいますので恐らくは……………』

電話越しにガスツ、ゴスツという鈍い音がする。

それとどう聞いてもランスロットの音がするので、そこはスルーした。

「そっか、落ち着いたらそっちに合流するから」

『はい……………』

落ち込んだマシユの声に藤丸も苦笑する。

「別に会えない訳じゃないからさ。」

またゆつくり二人で歩こう。

「じゃあ、また後でね」

『はいっ!!』

嬉しそうなマシユの声とその後ろから『マシユっ！やめっ』という声を聞いて苦笑しながら藤丸は電話をきる。

「さて、どうしようか……………」

邪ンヌとゴルゴーンの戦いを遠い目で見る藤丸。

魔術協会からまた苦情来るんだろうな、と段々と憂鬱になっていく。

そんな時だった。

「お困りのようですね、マスター」

藤丸の後ろから声をかけたのはいつの間にか来ていた私服姿のマルタ。

「あ、世紀末覇者先輩、ちーっす」

「ぶっ飛ばすわよ?」

藤丸は舎弟のように頭を下げる。

マルタは青筋を浮かべ、グツと拳を握る

「冗談だつて。」

え、何? マルタ姐さんも来てたの?」

「はあ、カルデアから何人が脱走したのよ。」

下手人というか黒幕はわかってるんだけど……」

「ひよつとして、頭文字がMの人ですかねえ?」

「お察しの通り、マーリンの野郎ね。」

ああ、モリアーティ教授は名探偵が見張ってるから大丈夫よ。

あれが関わってたらどうなったことやら」

「大惨事は確定だよなあ……」

「まあ、そういうことで連れ戻す為に何人が来ているの。」

多分、脱走した何名かはマスター目指して来るだろうから、マスター探してただけど大当たりね……」

溜め息と共に戦っている二人を見るマルタ。

ん？と藤丸はマルタの姿に違和感を覚えた。

「つたく、アンタら、いい加減にしなさいよっ!!」

戦っている二人に叫ぶマルタ。

「うっさいのよ、ヤンキー聖女!」

「その通りだ、ベタニアの聖女。」

そこで大人しく見ている」

二人のその言葉を聞いたマルタは青筋を浮かべニッコリ笑う。

ガチリと手甲を嵌め込み、ぐるんぐるんと腕を回していく。

あ、ルーラーで来てると藤丸は冷や汗をかく。

「マルタ姐さん、落ち着いて!」

クラス相性が悪すぎる!!」

「あつはつは、クラス相性がなんぼのもんよ!!」

来なさい!!タラスクっ!!」

マルタによってタラスクが召喚されれば、身の危険を感じた藤丸は何とビルの屋上か

らそのまま飛び降りた。

走って飛び降りる際にタラスクと目が合う藤丸。

(お互い、苦労してますねえ……)

(ええ、ホントに……)

(ちくわ大明神)

(誰だ、今の)

藤丸が飛び降りた後、ビルの屋上全体を巻き込む程の大爆発が起こる。
飛び降りた藤丸はそのまま地面に向かい落ちていく。

「おおおおおおっ?!?!」

飛び降りた藤丸の命運や如何に。

次回へ続く。

ところで君ら何やってんだ？

—How do you like fate?—

これはカルデア一行が京都に来る前の話である。

カルデア地下格納庫にてあるものを見上げるマシユ。

その横には土下座して座っている藤丸、テスラ、エジソンの三人。それを見ていたエレナ女史はため息を吐く。

「先輩、これは一体、何なのでしょうか？」

マシユの震える声がカルデアの地下格納庫に響く。

この地下格納庫は土下座している三人とそれに悪のりしたスタッフたちの手により勝手に作られたものである。

マシユの見上げる先にあつたのは巨大な鉄の巨人。

それはどう見ても、異端のキャスター、チャールズ・バベツジを一回り、いや二回りは大きくしたものだ。

「……………バベツジです」

「Mr. バベツジがこんなに大きくはなかったはずですよね？」

マシユに睨まれ、三人は視線を反らす。

「お、落ち着きたまえ、レディ」

「そ、その通りだ。それにこれは科学の発展にとっても重要な……」

「お二人は黙っていてください」

「アツ、ハイ」

マシユの剣幕にテスラ、エジソンは黙る。怒る乙女には流石の科学者も弱かった。

「で、先輩、どういうことなんですか？」

「巨大ロボに乗るのが子供の頃の夢だったんです……」

「それで、どうやってこう……まさか、先輩、聖杯を使っただけですか?！」

「既に種火周回でlevel100カンストしております……」

「なにやってるんですか、もーっ!」

「バベツジがカツコいいから、これは仕方ないんや……」

「大事な聖杯を何に使ってるんですかーっ!」

せめて、宝具的にアステリオスさんか、アーラシユさんに使って上げてくださーいっ!」

「それはいつばいい平行世界の俺がやってるし……ねえ?」

科学者二人と「ねえー?」と首をかしげる藤丸。

「先輩はメタ発言を控えてくださいっ！」

あと科学者組の方は仲良く首を傾げないでくださいっ！」

マシユの劍幕にシユンつとする三人。

それを見ていたエレナ女史が助け船に入る。

「まあまあ、科学者なんて夢見るのがデフォルトみたいなもんだから怒ってもしようがないわよ、マシユ。」

それよりもマシユは仲間外れで寂しかったんだよね？」

辛辣な言葉を言いながら、よしよしとマシユを抱き締めるエレナ女史。うう、とエレナ女史に抱き締められ、顔を赤らめるマシユ。藤丸はカシヤツとその二人の様子を写真に収める。

エジソンは「これが……バブみ……っ！」とあの顔で唸っており、テスラはうんうんと頷いていた。

三人への説教が再開されたのはそれは当然と言えた。

さて、時は戻り、藤丸が高層ビルから飛び降りたところに戻る。

「うおおおおおおつ?!?!」

高層ビルからのダイブ。ロープさえないままの落下。バズーこのままだと藤丸は潰れたト
マトになってしまう。

落ちる藤丸は声の限り、その名を叫ぶ。

「来いっ!!バベツジイーっ!!」

それは空想、夢想、理想の成れの果て。この世界にあり得た一つの可能性。

それが今、ここに藤丸の手により顕現した。

『その言葉、承認した』

地面を割り、出てきたのは巨大な鋼鉄の腕。かいな

藤丸をその手に乗せ、全体像が地面を砕きながら現れる。

見える灰色の鋼鉄の巨体。その身体から噴き出す蒸気の熱量足るや。

『我はひとたび死して、空想世界と共に在る者』

蒸気を放つ鋼鉄の巨神。

その名は。

『我が名は蒸気王っ!!』

蒸気王、チャールズ・バベツジ。

マスターの危機を救わんがため、その鋼鉄の巨神は吠えた。

思わず、ビルの屋上で戦っていたゴルゴーン、邪ンヌ、マルタの三人の手が止まる。ゆつくりとせり上がってくるバベツジの手の上で、藤丸が腕を組み仁王立ちしているのが三人には見えた。

『Oh、まさかのガ○ナ立ちネー』

どこぞの神様の声が聞こえた気がするがそこは無視。

「三人とも、覚悟は出来ているよな？」

にっこりと笑う藤丸に冷や汗をかく三人。

マルタは思わず、藤丸に弁明するのだが。

「ちよつ、わたしは止めに来たんだけど?！」

「二人の言葉にキレた時点で姐さんもギルテイ!」

藤丸の言葉にぐうの音も出ないマルタはうなだれた。

「行くぞ、バベツジ。宝具^{シヨウタイム}展開だ………っ!!」

藤丸のその言葉にバベツジの目が紅く光る。

『了解した。』

蒸気圧最大、デイファレンスエンジン開放っ!!
唸りをあげる鋼鉄の巨神。

開放された蒸気機関から発せられる熱量はさらに増していく。
鳴動する地面。上昇のために吹き上がる蒸気。

『見果てぬ夢を今ここに……っ!!』

彼の持つ、まるでドリルのようなステッキはゆつくりと、だが、次第に高速回転を始め、まさに台風の如し。

それは果たせなかった彼の夢の結晶。チャールズ・バベッジの渴望。
彼はこの一撃にその全てを込める。

『我が空想、我が理想、我が夢想っ!!』

——ディメンジョン・オブ・スチーム
絢爛なりし灰燼世界っ!!』

放たれた一撃は三人を巻き込んで高層ビルの屋上をぶっ飛ばした。

「とういことがあつたんだ」

「な、なにやつてるんですかーっ!!」

藤丸は合流したマシユに怒られた。

怒られているのも気にせず、ずずーっとコーヒーを飲んでいる藤丸。

今、藤丸とマシユは二人つきりでカフェでお茶をしている。他のサーヴァントは気をきかせて買い物中である。

「サーヴァントの三人とビルはどうなつたんですか?」

「三人は他のサーヴァントたちに連行、カルデアに強制送還。

ビルに関しては、人も避難させてたし有難いことに売り手の着いてないビルみたいで時計塔にお金払わしてカルデアで買いました」

「ホントに何してるんですか……でも、よく時計塔に払わせられましたね」

マシユの疑問に藤丸は顔をあげる。

「うちのカルデアにいるじゃん、口の上イセイバーがさ」

その言葉にマシユは赤くふくよかなセイバーを思い出した。

「カエサルさんですか？よく交渉を引き受けてもらいましたね？」

「俺もカードは切ったからさ」

藤丸の苦笑いにマシユは首を傾げた。カードとは一体、何なのだろうか？

それを話すつもりはないのだろう、藤丸はそれについてマシユには語らなかつた。

時間はまた逆戻る。

『藤丸くん、流石に時計塔から苦情来たんだけど……』

カルデアのスタツフからの通信。

少しばかり青ざめたスタツフの顔色にあちやーつと顔を覆う藤丸。

「んー、ごめん。カエサルとモリアーティ教授を呼んでもらっていい？」

『カエサルと……あのモリアーティ教授？』

「そ、あのモリアーティ教授」

藤丸の言葉にスタツフは首を傾げる。

交渉ごとのプロフェッショナルであるカエサルはわかるのだが、何故モリアーティ教

授を呼ぶのか。彼が天才的な犯罪者にて数学者であるのは知っているが。

『呼ばれて、私が来たっ！』ということでは何か用かね』

「かくかくしかしかでき」

『なるほど、時計塔との交渉を私に任せたいと……………』

それでわかるんだとカルデアスタッフは呆れている。

カエサルは考えながらも人の悪い笑みを浮かべ、藤丸を見る。

『マスター、それを行うについて私に払う代価はあるのかね？』

「クレオパトラと行く世界一周の旅なんか如何かな？」

『ほほう、魅力的ではあるが代価としては足りない。』

どうせ、他にもやらせることがあるのだろうか？』

「(い)明察。

ではこれはどうかな？」

藤丸は顎を擦りながらカエサルを見る。

「——カエサリオンの召喚」

その一言にカエサルの表情が凍る。

スタッフが藤丸に叫ぶ。

『ま、待ってくれ、藤丸くん！』

カエサリオンは確かにプロレマイオス15世としても名は残っている。だけでも、英霊になるほどでは……』

『ならば、幻霊として呼べばいい。いやはや、考えたものだね、マスターくん。それのためにワタシを呼んだのかネ？』

モリアーティ教授はいつのまにかスタッフの後ろに髭を弄びながら立っていた。

「教授にもやってもらうことはあるんだけどね？」

『ふむ、まあ、それはさておきだね。』

カエサルくんの息子を召喚出来るかどうかについてだが、幻霊としてならば理論上は出来る。

何せ血縁者が二人いるのと……これもまた大きな部分を占めるがこのカルデアにフアラオに連なるものがあることだ』

ラムセス2世ことオジマンディアス、ニトクリス、イスカンダル。フアラオとして名を残したこの三名がいることによりカエサリオンを召喚出来る確率は上がると藤丸は思っている。

神祖ということもあるがロムルスに引かれ、過去、未来のローマ皇帝が現れたことがあった。召喚する媒体としては十分なものであると藤丸は推測していた。

「というこゝとただけど、カエサル。」

これは代価としてはどうかかな？」
暫しの無言。

カエサルの方が開く。

『ふむ、マスターも交渉術を覚えてきたということまで及第点というところか』

「じゃあ？」

『ただ、召喚が成功すればその提案は私とクレオパトラにお釣りが来るレベルだ。その換算をすればひつきりなしの満点だったのだがね？』

「いやいや、カエサルの思っている以上に働いてもらうからさ」

はっはっはっ、と笑う二人にカルデアスタッフは冷や汗を流す。

この二人、一体何をしようと言うのか。いや、そういえば、忘れていたがモリアーティもいるのだ。

スタッフは思った。この組合せはヤバイと。

『で、アラフィフのワタシは何をすればいいのかネ？』

幻霊召喚が出来るかどうか聞きたいがために呼んだだけではないだろうか？』

「カルデアにちよつかいをかけてる連中に嫌がらせをお願いしたいんだけどさー？」

なんか良い案ない？モリエもーん？」

『ふむ、よーし、ならばマスターくんのためにオジサン頑張っちゃうぞーっ!!』

マスターくん、燕青くんとアサシンの方のエミヤくんに百貌ちゃん借りるネっ！」
「殺さない程度でよろしくー」

コイツら軽く何を決めてんだとカルデアスタッフは胃を押さえながらうなだれた。

そして、ちよつかいをかけてきた時計塔の魔術師たちを哀れに思う日がくるとは思っ
ていなかった。

基本的に藤丸ははっちゃけ過ぎるところはあるが善人だ。

困っている誰かを助けるし、優しさも兼ね備えている。

ただ、敵には容赦はしない人間ではある。

カルデアスタッフは彼を敵に回した魔術師たちを哀れに思いながらも「ま、自業自得
か」と考えるのを止めた。

何かのフェロモンでも出てるんですかねえ？

— How do you like fate? —

京都のとある宿。

ぬ

「いやあ、マスターにはナイショで京都に来たけどホントに懐かしいわ……」

「おや、鈴鹿さんは京都に来られたことが？」

「ホント、昔の話だし」

そこにいたのは浴衣姿の鈴鹿御前と玉藻の前。藤丸にはナイショで何人かのサーヴァントを誘い、女子会として京都に来ていた。

カルデアにマスターこと藤丸立香がいないのだ。基本的にフリーダムな英霊を誰が止めるというのだろう。スタツフ？ 死んでしまいます。

「わたしのホームは基本的に勢州だし？ あんまり来ることはなかったけどさあ」
「今で言う三重の方ですねえ」

ズブツとお茶を飲み、お茶請けを食べる鈴鹿を見ながら玉藻もお茶を飲む。

「わたしはともかくアンタは良かったの？京都には良い思い出ないっしょ？」

「確かに私もあまり京都には良い思い出は御座いませんでありますのであまり来たくはなかったのですが。旅行となればそれはそれ、これはこれ。だけど安倍晴明、テメーはダメだ」

「あんたはんもおいたしはつたもんなあ」

クスクスと笑うのは酒天童子。着崩した浴衣を羽織り、艶やかに笑みを浮かべる姿は艶やかなもの。鈴鹿、玉藻に比べれば身体は貧相に見えるかも知れないが、酒天の動作、仕草が二人にも劣らぬ色を見せていた。

「私は晴明神社には絶対に行きません……!!」

「でも、どっちみち神在月に出雲大社で会うんだし……」

ドンつと机を叩く玉藻。忌々しげにギリギリと歯ぎしりをする。

「誰ですか?!あの性悪を神なんかに格上げしたのはっ?!」

「それ、アンタらもその原因作った本人だと思っただし……」

「ウチは直接的な関係があったわけではないけどなあ。あの丑女頼光の家の向かい隣に家が
あったから恐らく要らん入れ知恵はやつとるやろし。基本的に陰陽師はいけすかん
わあ」

「もしも、あの性悪が実装されたらと思うと……ぐふっ」

「おお、メタい」

丸机に突つ伏す玉藻に苦笑いをしながらお茶を飲む二人。そんな時であった。

「おい、酒天っ！この生八つ橋美味いぞっ!!」

そんな三人を無視したようにパーンっと引戸が開く。引戸を開けたのはイバラギンこと茨木童子であった。

口にはたらふくの京都の某有名菓子店の生八つ橋を口に含み現れた茨木を三人は生暖かい目で見た。

「茨木さんはホントに変わりませんねえ…」

「うん、なんか落ち着くっていうか……」

「これが茨木やしなあ……」

茨木の頭に？マークをつけてモシヤモシヤと八つ橋を食べる姿は可愛らしかった。カルデアでは既に茨木に菓子を与えて食べている様子を愛でるという行為が流行つていくというのを茨木童子本人は知らない。

「??何の話かは分からぬが、吾は誉められているのか？」

「誉めてる誉めてる」

微笑ましい笑みを浮かべる三人に困惑しながらも、ふんすと嬉しそうに胸を張る茨木。

「まあ、話を戻すけども、こちらは神在月に島根なんか行かへんからよう知らんのだけど

「いっぱい神が来るん？」

話を戻すように酒天が瓢箪から赤い酒杯に酒を入れながら鈴鹿、玉藻の両名に聞く。「そうですねえ……やはり、日の本は八百万というだけあって沢山の神仏が来ますが。最近では日本の神人口がとんでもなく増えまして」

うんざりと言わんばかりの玉藻の表情と、あー……つと空を仰ぐ鈴鹿に鬼二人組は首を傾げる。

「どうか神人口とは一体なんなのか？神様つて増えるのだろうか？」

「日本の風土と言いますか、日本人のちゃんぽん具合というか、オタク文化のせいと言いますか……今、日本の宗教がカオスなんです」

「どういうことなん？」

「その……いつの間にか外国の神様が日本に増えてまして。いえ、昔から仏教を受け入れた時にその片鱗は垣間見えてましたが……」

はあ、とため息をついた玉藻。

「宗教を受け入れるのはいいのですが、魔改造する癖をどうにか……この前、神在月にニヤルラトホテプさんが女性の姿で来られましたし」

玉藻はその時のことを思い出す。

『いつもニコニコ、這いよる混沌ニヤルラトホテプです!』

『またか!』

『知つてた(白目)』

『ホントにウチの民草は女体化好きだよなあ!』

『いつの間にか俺も女体化されてたしなあ……妻に弄られたわ』

『って言うかウチの国の神話違うだろうがあ!』

『日本には基督教も仏教もイスラム教もあるし……もうクトゥルフ神話も日本の宗教で

いいんじゃないかな?』

『SAN値チェック不可避イ!』

『ああ、またこの国にようわからん神話体系が……』

『ワガイハネジレクルウー』

『大和魂を見せてやる!』

『(p)ハイ!ワカリマシタ!』

『(p)ワーツ』

「と、言うことがあります」

「なんやの、そのカオス」

遠い目をした玉藻、鈴鹿の二人に呆れる酒天。我関せず、言わんばかりに八つ橋を食べている茨木。茨木ちゃん、それは一体、何箱目かな？

「まあ、大変やつてのはわかったわあ」

「大変なんてものじゃないんですよ……あと何故か、この前の神有月にケツアルコアトルさんやイシユタルさん、アルテミスさんが居られました。思わず二度見しました」
「うーわー……」

「あと、神有月には大國主を筆頭に神々で縁結びの相談をするんですが、彼女たちそこにも参加を……アルテミスさんは特にこの子はどうか？この子はどうか？とか勝手気ままにしますのでもう散々な状態に」

その時の事を思いだし、思わず胃を押さえる玉藻。今の玉藻は軽く中間管理職に疲れた会社員のようだった。

「特にマスター関係はやバいことに……」

「ほんになにしとんのやろか……ん？マスター関係？」

玉藻の言葉に酒吞は顔をしかめる。

「まだ人間の方をオススメするのはいいんですけど!!ですが、そちらの処女神とか神様とくつつけるのはやめてください!!もう時代が違うんです!」

「あー、ヘクトールがマジギリシャの神々は止めとけつて言つてたし。まともなのヘステリアつていう神だけとか……」

バンつと机を叩く玉藻。鈴鹿はため息を吐いて天井を仰ぐ。

「ただ、私たちが関わらずともマスターの縁はとんでもないことになってましたけどねえ……」

「どないなつてたん?」

「そうですね、某有名RPGのファイア盤の如しと言いますか……普通、あそこまで縁は結ぶ人はいませんよ」

アハハと笑う藤丸を幻視した玉藻は思い出したかのように胃を押さえる。

「それは……少しおもしろくないなあ……」

酒呑童子の小さな呟き。それを玉藻、鈴鹿のフォックスイヤーは聞き漏らさなかつた。

「お? (慈愛)」

「ん? (慈愛)」

「???」

酒呑童子は玉藻と鈴鹿のニヤニヤ笑いが鼻についた。あと茨木のポカーンとした面がいらつとしたので叩いた。

「いやあー、金時さんと同じくマスターに入れ込んでますねえ」

「恋？恋？」

「うつとうしいわあ……」

ちよつと不機嫌になった酒呑をさらに追い詰めるデバガメ神様二人。酒呑はしつしつと手を振って二人を追い払う。

「別に恋とかやなくて、小僧金時もそうやけど欲しいと思ったもんはウチは奪うと決めとるさかいに……それを誰かに唾つけられるのはなあ？」

ニツコリ笑う酒呑。その笑みに玉藻はまた胃がキリキリするのを感じた。この笑みを美しいのに恐ろしいと感じてしまう。そうだ、忘れてた。彼女、鬼だった。

「で、玉藻はどうなの？恋とかは？」

マスターを巡ってとてつもない争いの予兆を感じた鈴鹿は話を玉藻に振った。

「そ、そうですねえ、私は月の裏側ら辺にイケ魂の持ち主がおりますし……ネロさんというお邪魔虫はいます。鈴鹿さんは……旦那様がおられましたね？」

「いやまあ、確かに結婚してるからもう恋とかしないけどさあ。他人の見るだけでも楽しいじゃん？」

「なるほど。例えば、どなたの?」

「そりや、マシユちゃんでしょ! あれはいいよね! 恋を知らない女の子が恋する姿はたまらないしっ! もうマスターと話している彼女の顔つたらもう……………いいよねっ!」

バンつと机を叩き力説する鈴鹿。それに対して、両手を顔の前に組み、目を光らせた玉藻。

「確かにマシユさんもヒロインしてますが、気づいてませんか? マシユさん以外にヒロイン力を高めているとんでもないダークホースがいると……………」

「そ、それは…まさか……………」

「メルトリリスさんです……………! たまにマスターを話したそうにチラチラと見ながら、実際に話したらツンツンしてしまって後で自己嫌悪するあの姿……………たまらないですねぇ!」

その名前を聞いた鈴鹿は忘れていたと言わんばかりに天を仰ぐ。この二柱、どうも少女漫画やらなんやらにハマっているらしい。特にカルデアでは他人の恋愛を見て楽しんでるサーヴァントとスタツフは多かった。

中には腐った方もいる。藤丸が男性サーヴァントと話しているのを目を見開いて凝視するスタツフもいて藤丸は冷や汗を流すことも多々。

ちなみにカルデアにも裏では薄い本が流れている。胴元はもちろん黒髭である。年少組に悪影響を与えることも配慮してルーラーたちに粛清されたが。

「なんや始まったわあ……」

なんとも言えない茶番劇にすでに話から離れて茶を啜る酒呑童子。

「そーいや、茨木はマスターのことどう思ってるん？」

ふと酒呑童子は未だに甘味を貪る茨木童子に聞いてみた。気になつてはいたのだ、茨木童子が藤丸のことをどう思っているのか。

「吾か？吾は……ふむ、好いてはおるぞ？」

それはあつけらかんと。さらりと藤丸への好意を吐いた。酒呑童子は思わずポカンをとしてしまう。

「吾の腹に入りたいほどには」

ポカンとしていた酒呑童子ではあるが、その言葉を聞いてまるで三日月のように笑みを浮かべる。

「ほんに怖い、怖いわあ……なら、仲良う半分に分けよか」

「おお、吾も酒呑ならば良いぞ！」

嬉しそうに笑う茨木と酒呑。藤丸本人の預かり知らぬところで半分に分けられることが確定した。

「へっぷしっ！」

「先輩、風邪ですか？」

当の藤丸は清水寺の中でくしやみをしていた。

番外編

カルデア島～マスターは無人島を開拓できるか?～

— How do you like fate? —

これは藤丸立香、他サーヴァント。彼らの無人島開拓記録である。

「藤丸くん。開拓、もしくはは農作業に興味はないかい?」

唐突に振られたディレ……Dr. ロマンの言葉に首を傾げる藤丸。

「え? どういうこと?」

藤丸は、意味がわからないよ、と? マークを頭に浮かべ聞き返す。

「まあ、聞いてほしい。今、カルデアの食糧はほとんどレイシフト先から買ってきたものか、備蓄の缶詰め。調理場担当のエミヤやブーデイカが美味しく調理してくれているお陰で少しの量でも皆が満足しカルデアの食糧事情は安定していた……」

カルデアの食事情を語るロマンの苦渋の表情。それを見た藤丸を嫌な予感が襲う。

「だが、だが、しかし！彼女を、彼女たちをカルデアに召喚した時から、我らがカルデアの食糧の供給が追い付かなくなってしまうんだ！」

見てくれ、と後ろのモニターに映るのはセイバーのサーヴァント、アルトリア——否、複数のクラスに分けられたアルトリア・ペンドラゴンたちである。

厨房で彼女たちの料理を作っているのはエミヤ。目を血走らせ、鍋を振るい、包丁を走らせる。その姿はまさに錬鉄の英雄コック。そんなエミヤの姿に藤丸はぶわつと涙を流した。

「圧倒的ツ……圧倒的、暴力ツ……！」

まさにそれは数と質の暴力。エミヤはそれを首の皮一枚で耐えているだけに過ぎない。油断も慢心さえも出来ない食の戦場。

ブーディカやマルタはエミヤのフォローに入ろうとするも他のサーヴァントたちの食事も作らなければならない。実質、エミヤ一人と飢えた王たちとの戦い。一日の食糧を計算しながら、相手を満足させるために工夫を重ねる。

（爺さん、遠坂。オレ、正義の味方になれたかな……？）

鍋を振るいながら薄れ行く意識の中、エミヤは遠い記憶を思い出す。育ての親との約束。少年の頃に体験した聖杯戦争に赤い悪魔に呼ばれたことを……。

「「「「「ちそうさまでした」」」」」

食事を食べ終えた彼女たちの声が聞こえた瞬間、緊張の糸の切れたエミヤの身体は崩れ落ちた。そこからの映像は砂嵐となり先はなかった。

「理解、してくれたかな? 藤丸くん」

「ああ、痛いほどに……」

ロマンと藤丸は目頭を押さえて頷き合う。

「これは特異点の任務ではない。だが、これはカルデアの一大事だ。食糧がない。ただそれだけで我らがカルデアは滅びることになるだろう」

重々しい空気の元、藤丸は真剣な表情で聞いていた。

「そこで我々は早急に安定した食糧自給出来るように時代に干渉しない範囲の広大な無人島を発見。そしてそこに農場を立てようと思っっている」

ロマンは後ろのモニターに島の写真を写し出す。人も居らず、広大な自然が残る無人島。これを藤丸たちが開拓するのだ。

「ぶっちゃけ、『自重せよ、アルトリア』と言ってやりたいがそれで止まる彼女たちではないからね」

藤丸はロマンの一言に何とも言えない気持ちになる。エミヤとも話したのだが、彼女らは時たま話が通じないのだ。特に食事関係とか食事関係とか。

『諦めろ、マスター。これがアルトリアを養うということだッ…』

エミヤの声が幻聴で聞こえた。

「取り合えず、藤丸くん。早急に無人島に向かつてくれるかな？ かくいう僕もお腹が空いててね……」

ぐうーつとお腹をならして机に突っ伏したロマン。

「任せろ！ 美味しい食物作ってくる！」

藤丸は走ってレイシフトのためにコフィンに向かう。皆の食糧のために。カルデアのエンゲル係数を救うために。

カルデア島々マスターは無入島を開拓できるか？

々々 (例のBGM) 々々

荒れに荒れた大海。その海を走るのは黒髭ことエドワード・ティーチ船長の駆る

クイーンアーンズ・リベンジ
アーン女王の復讐号。

「荒れてます、荒れてますよ、先輩っ!!」

「デユフフ、いい感じの海のシケ具合wwおい、テメエらっ!!吐きそうになってんじゃねえぞっ!!あとBBAの水着解禁まだですかー?!」

「黒髭氏の最後の言葉はともかく皆さんファイトですっ!!」

何人かのサーヴァントはあまりの大シケに船酔いしていたが、藤丸は舟の船頭に立ち、前を見据えていた。

そんな彼を尻目に顔色の悪いサーヴァントが何名かいた。

「うげえ、マジで気持ち悪い……よくマスターは持つよなあ……」

「さ、流石にこのシケ具合は……うつぶ……」

「あらあら、陸の狩人はだらしがいいですね」

「しょうがないよ、アーン。今回の航海は流石に希に見る大シケだから、海の間人間でも酔う人間は酔うよ」

アシスタントの為に呼ばれたのはアタランテとロビン。流石に荒れに荒れた大海原は相手が悪かったようだ。流石のアーンとメアリーは慣れたものでケロリとしていた。

今、この船に乗っている人数はかなりの大所帯。ケルト、ギリシャ、インド、日本、円卓、海賊の英雄数名が乗り込み、すわ戦争かといわんばかりの団体である。それが無人

島開拓の為だと言うのだからほとほと呆れるばかりであった。

「つていうか父上が自重してくれたら問題じゃなかったんじゃないかね？」

「——ほう、つまりモードレッド卿は私に死ねと？」

何にも関係ないのにマスターにホイホイ着いてきたモードレッドを、この件に関して流石に責任を感じたアルトリアが睨み付ける。睨まれたモードレッドは口を×にして「うええ、父上は人の心がわからない」と嘆いた。

「ふむ、今回は私は戦闘のために呼ばれた訳ではないのか」

「おうよ、流石に知識人は多くても農業、建築を含めた知識を持つるのはアンタしかいねえからな」

「つまり、私はAKIO枠か……………」

「ああ、歳食ってる分含めてな」

「ほう、よほど死にたいようだな？クー・フリーン。いつペン死んでみる？」

「——わりい、冗談だ。冗談だからゲイボルグをしまつてくれ、師匠」

スカサハの槍を白刃取りで耐えているクー・フリーン。足場の悪い中、冷や汗を流しながらのゲイボルグの白刃取り。足場が悪いながらの二人の立ち回りは流石と言えるのだが、立ち回りの理由がしようもなさすぎた。

「ま、まあ、ともかくだ。今回は切った貼ったじゃねえからよ。ゆっくりやっていこう

や、師匠」

「何を言っている、クー・フリーン。教えるに当たって私は妥協などしない。戦闘ではなくともな」

(目がガチじゃねえか……どんな農業教えるんだよ……)

スカサハの目を見たクー・フリーンは軽く引いた。ふんすと胸を張る姿は(歳に似合わず)可愛らしいものだが。

「うっしやああつ、見えてきたあああつ!!」

サーヴァントたちが思い思いの中、アン女王の復讐号に船頭にいた藤丸の声が響く。

サーヴァントたちも船から覗く。海賊の血が騒いだのか望遠鏡を覗いていた黒髭の口角がニヤリと上がる。

「よおし、野郎共っ!!準備しな、上陸だあッ!!」

おおつ、と船に雄叫びが上がる。

島に上陸する彼らに待ち受けているものは一体なんなのか。彼らは無事に無人島を開拓出来るのだろうか?

くく次回予告くく

「まずは拠点づくりだろおっ!!」

「すっごいまな板だよ、これ!!」

「まな板だな!!」

「まな板にしようぜ!!」

「(#、ε、ε) びきびき」